

付 編 1

- 1 江坂 輝彌・可兒 弘明・笹津 備洋 「曾畑貝塚発掘調査の成果」
- 2 渡辺 誠・可兒 弘明 「発掘経過」
- 3 小片 保 「曾畑貝塚人骨所見」
- 4 可兒 弘明 「曾畑貝塚出土ハイガイの開殻痕について」
- 5 乙益 重隆 「熊本県内の曾畑式土器出土遺跡」
- 6 熊本日日新聞社 「曾畑貝塚発掘調査関連報道記事」

1 曾畑貝塚発掘調査の成果

江坂 輝彌
可兒 弘明
笹津 備洋

1959年10月28日より、11月6日までの10日間に亘って曾畑貝塚を発掘調査した。その成果の要点について報告する。

発掘調査は先づ東西に長さ66m、巾1.5mのAトレンチを発掘。西より長さ10mごとに1区より7区までに区分した（7区は長さ6m）。ところで曾畑式土器を出土する貝塚は台地の西端部にのみで、1区から2区の西端に認められた。2区の東半部から、3、4、5区と6区の西半部までは貝層がなく、畑地の耕土層中に微細な貝殻片を混えるのみであった。この地区にも嘗っては縄文時代後期の土器を含む貝層が存在したものと考えられた。恐らく明治時代の後半か、大正年代に入って、この地の貝層が貝殻を焼いて石灰をつくる原料として採掘されたものであろう。

6区の東半から7区には縄文時代後期の鐘ヶ崎式、市来式などに近似の土器を出土するマガキを主とする貝層が見られた。

今回の発掘調査は曾畑式土器文化の文化内容、その編年的位置などの究明が主目的であり、Aトレンチ1区の東よりに、Aトレンチと直角に南北方向に、長さ12m、巾2mのBトレンチを発掘し、さらにBトレンチ2区の西側にCトレンチを発掘して、台上西端に所在の曾畑式土器を出土する貝層を徹底的に調査した。この地区にも上層には後期の土器を出土する貝層があり、その下に礫を含む黒褐色土層の間層を挟んで、曾畑式土器を出土する貝層が存在した。この貝層の下には褐色土層が堆積し、貝層直下のこの層の上面からは比較的少量に、曾畑式土器の復原可能な大破片が出土した。またこの層の上半部からは表裏に淡い貝殻条痕文が施文され、その上にみみず張れ状の細隆起線でかざられた土器片が出土した。さらにこの層の下部から、その下に堆積する黒色土層の上部に発掘をすすめると、山形、格子目、楕円などの廻転押捺文土器片が発見された。

曾畑式土器のほとんどは平底に近い丸底であったが、その下層から発見された条痕文土器や、廻転押捺文土器は平底をなす深鉢形の土器であった。

なお本貝塚の詳細な調査報告は近く公刊の予定である。

2 発掘経過

渡辺 誠

可兒 弘明

Aトレンチ第1区

曾畑貝塚を東西に縦断するAトレンチの西端10×1.5mが第1区である。本発掘に於て所謂曾畑式土器を包含する貝層はこの地区に於て発見され、これによってBトレンチ、Cトレンチが設定されて、曾畑式土器包含貝層が、ほぼ完掘に近いまでに発掘される端緒となった。

第1区では西より1～5までの2m平方の区を細分して発掘を行った。土地の人の言によれば台地の先端即ち西端は貝塚の南を東西に通ずる道路開鑿の際に盛土したものとのことであったが、発掘の結果第1区1及び同2の西寄りの部分がこれに当るものと認められた。即ち破碎された貝を混えた土層が水平に堆積し、且つ出土遺物は曾畑式土器から中世の瓦陶器に至るものまでが雑然として混在し、二次的堆積であることを示している。然し貝層下土層はこのような攪乱を受けた痕跡はなかった。

又第1区3と同4の間から2区にかけて南壁寄りに巾2mほどの塵芥穴があり内部のものから見て中世に作られたものと思われる。第1区4及び同5では次第に貝層が浅くなり、且つその厚さを減じて、消滅に近づき、次の第2区の西端で完全に姿を消す。

結局第1区を通観すると第1区1は二次堆積であり、第1区5は貝層の上端となり、第1区2より同4までが貝塚の主体部をなすことが明らかとなった。この部分では次の様な層序を確認することが出来た。

第一層 表土（耕土層）

第二層 第1貝層

第三層 礫層（間に土を含む）

第四層 第2貝層

第五層 貝層下土層

第六層 基盤（赤灰色粘質土層）

第1区5では第一層から第三層までは明確に分離出来ない（第三層は部分的に存在する）。

以上の所見から第四層（第2貝層）は第2区西端を頂点として、西に向って緩やかに下降する傾斜面に形成された貝塚でその末端は第1区2の西寄りの部分である。この上の第三層（礫層）はいかにして形成されたものか現在の所明らかになし得ないが、内部に相当量の遺物を包含する点から見て人為的な堆積と考えられる。更にこの上を覆う第二層（第1貝層）は、第四層と同じく第2区西端を頂点として西へ向って傾斜する貝塚でその末端は第三層、第四層を包み込むように急に下降して、第五層に直接達している。この様な形の堆積がどうして行われたかは不明であるが、第二層の堆積が開始されるまで第三層が露出していたであろうことは推測出来る。結局、曾畑遺跡に於ては、その台地の先端に第二層（第1貝層）及び第四層（第2貝層）からなる各々独立した二つの貝塚が存在することが推定出来た。これによって、この貝塚の東西の広がりを確認する為にBトレンチが設定されたのである。

次に各層に於ける遺物の出土状態及び種類について述べよう。

第一層（耕土）

第一層は耕作による攪乱を受けているので中世遺物、土師器、弥生・縄文文化後期土器、曾畑式土器

等が少量づつ混在していた。この層から磨製有孔小円板1が発見された。

第二層（第1貝層）

ハイガイ、カキを主とする純貝層で、縄文文化後期土器を包含する。土器の出土状態は貝層最下部即ち第三層直上にまとまって発見されたが、この区では完好なものは出土しなかった。獣骨ではシカが最も多い。

第三層（礫層）

茶褐色土の中にぎっしりと長径8cm内外・短径5cm内外の礫がつまった層で所々に落込みがある。この層中からは曾畑式土器片が出土するが、復原し得るようなまとまったものはない。

第四層（第2貝層）

ハイガイ、カキを主とし、カガミガイがやや多く見られる純貝層であるが、第三層に於て見られたと同じ礫が非常に多量に含まれている。全体的に曾畑式土器が包含されているが特に貝層最下部即ち第五層直上に於て復原可能な土器片群の出土が著しかった。発掘中に滑石含有の有無、文様構成、口縁の波状口縁と平縁との差異によって層位的差異が認められるのではないかとということが注意されたが、第三層、第四層を通じて発掘所見としては、これらの差異を層位的差異として分離することは不可能であった。石器は半磨製石斧1、石鏃1で非常に少ない。骨器も未成品1が出土したのみである。自然遺物はシカの他タイ、サバ等の魚骨があり、3の北壁寄りに小魚骨の群集部があった。

第五層（黒褐色土層）

第五層上部即ち貝層下10cm位までは曾畑式土器が出土する。これより約15cm内外掘り下げた所から指頭細隆起線文、条痕文土器が出土した。これらは第1区4、同5に於いて確認されたが、第1区1、同2では曾畑式土器と混在し、且つBトレンチで確認された。更に層位の異ると見られる押型文土器も混在して発見された。猶この層の上部から人骨片が出土した。

第六層（赤灰色粘土層）

径15cm内外の軽石を多量に含む粘土層で、全くの無遺物層である。

このトレンチでは貝塚の規模と層序の状態を確認する為10cmのレベルによって掘り下げた為、傾斜によって層序と矛盾した結果の出た部分が出た。この為、精密な層位掘りはCトレンチを設定して行うこととなった。

Aトレンチ第2～5区

東西に長いAトレンチの中央部を占める第2・3・4・5区は、二次的に破碎された混貝土層が数十cmの厚さで一様に堆積しているだけで、西貝塚の東端としての第2区、第3区発見の人骨、第5区における混貝土層下部に残存した純貝層、押型文を出土する貝層下土層等の他は、プライマリーな状態で遺跡及び遺物に対する所見を求めることは出来なかった。貝層が広範囲に亘って破碎された原因は、土地の方々の言葉によると明治年代に焼灰をとるためにかなり大規模な抜取りが行われたためだそうである。貝は微細な破片となり、魚骨、獣骨、土器片等が殆んど小片のものばかりであったことは、これらが人為的、二次的な破壊によるものであることを裏書きするものと思われた。

第2区

この区では西に向って地表面が傾斜しており、表土層、混貝土層、純貝層、礫層、茶褐色土層、基層の礫交り赤色土層の順に堆積している。

1. 表土層

厚さおよそ10cmの茶褐色層で、曾畑式や土師器、青磁等の小破片を混在している。

2. 混貝土層

この層は先に述べたところの破碎された貝層であって、貝はみな細片となっているが、マガキ・ハマグリ・ハイガイ・アサリ・オキシジミ・アカニシ・スガイ・ヘナタリ等が識別出来た。その他獣骨若干と馬の歯が数個出土した。石器は磨製石斧3点とスクレイパー1点出土した。この層の上部には縄文後期の土器片を含むが、下部は曾畑式及び轟式のみである。

3. 純貝層

この層は1区よりの混貝土層下に小範囲に存在するもので、礫層をその一部が覆っている。混貝土層が破碎をまぬがれたものらしい。厚さはおよそ30cmである。

4. 礫層

この礫層は第1区の礫層の東端にあたるもので、1区との境からおよそ3mのあたりまで伸びてきている。この層は厚さ約30cmで、滑石を含まない曾畑式が発見された。

5. 茶褐色土層

厚さ約50cmの貝層下土層であり、その上部で曾畑式、轟式の小片が若干発見された。またこの層から勾玉が1個発見されたことは注目されることである。

6. 礫交り赤色土層

地山であり、遺物は全然包含しない。西に向う傾斜は地表面より著るしい。

第3区

1. 表土層

厚さ約20cmの茶褐色土層で耕作土であり、特記すべきことはない。

2. 混貝土層

この層は西半では厚さ20~30cmであるが、東半では厚さを増し約80cmになるところもある。貝は細片となっているがハイガイ・マガキ・オキシジミが最も多く、ハマグリ・ヘナタリ・フトヘナタリ等も少しあった。土器は沈線文等を有する縄文中期のものや土師器等が混在していた。西端においてこの層の落込みがトレンチに沿って2×1mの大ききで発見され、更にこの土壌中より東に頭をおいて伸展葬の埋葬人骨が発見された。このあたりでは混貝土層の厚さは約20cm、落込みの深さは30cmである。人骨の周辺は薄く腐蝕土層におおわれている。頭蓋骨附近にはマガキ・ハイガイ・オキシジミ等がそれぞれ若干かたまって存在していた。人骨は副葬品その他の明瞭な伴出遺物がなく、所属時期の確定は極めて慎重を要する。土壌内部より発見された土器片はおよそ10片ほどあるが、頭蓋骨に接して条痕文土器のやや大きい破片が発見された。その他もほとんど条痕文で、曾畑式は1片きりない。人骨よりやや上位に弥生式の破片が1片出土している。この層が二次的な破壊をうけているために前後関係をにわかには決し得ないが、人骨はこの層に先行すると見て良いかと思われる。

3. 貝層下土層

この層は厚さ約50cmの茶褐色土層で、この区の西半にのみ分布する。そして第4区東半以東に分布する茶褐色土層に対比するものである。

4. 礫交り赤褐色土層

この層が地山であり、通常混貝土層及び純貝層とはその間に茶褐色土層をはさんで直接に接すること

はない。ただこの区の東半から第4区の一部にかけては茶褐色土層の堆積は見られず直接に混貝土層に接している。

第4区

この区では表土層、混貝土層、同下土層、基層の順で堆積し、地表面は東から西へ向って緩やかに傾斜していた。

1. 表土層

茶褐色の耕作土で約20cmの薄い層であり、土師器、須恵器の細片が僅に含まれていた。

2. 混貝土層

表土層の下に堆積し厚さは一定しないが、およそ40cmであり東半がやや厚い、貝は非常に細かく粉碎されている。わずかにハイガイ・マガキ・スガイ・イボニシ・フトヘナタリ等が識別し得た。貝以外の自然遺物は殆ど検出できなかった。人工遺物においても無文の縄文土器片1片と土師器、須恵器の細片若干と青磁の小片を2片発見したのみである。第3区寄りの北壁に沿ってこの層の下にピット様の落込みがあり、混貝土層がそのまま充填していた。貝層が破碎されたときに局部的に穿たれた穴らしい。長径は東西約150cm、巾は55cmで深さは50cmである。この中からは須恵器破片、曾畑式破片、条痕文土器、無文土器の破片とが極く少量発見された。

3. 貝層下土層

茶褐色を呈する土層で、西から東へ向ってゆるやかに傾斜している。前述のピットの東側に堆積が始まり、西側には見られない。ピット附近では厚さ約5cmの薄い層であるが東するにしたがって厚み増し約50cmになる。

4. 礫混り赤褐色土層

第3層の下に広く分布する基層である。

第5区

この区では表土層、混貝土層、褐色土層、桃褐色粘土層の順に、わずかに西に向って傾斜しながら堆積していた。東端では混貝土層と褐色土層との間に純貝層が存在する。

1. 表土層

厚さおよそ10~20cmの耕作土層である。遺物は出土しなかった。

2. 混貝土層

この層は先に述べたごとく破碎された貝層であり、攪乱をうけて遺物はみな細片となり特に見るべきものもない。識別し得た貝類は主にハイガイで、他にハマグリ・カキ・アサリ・オキシジミ・アカニシ・レイシ・スガイ等であった。また人の頭蓋骨の細片も発見された。土器は縄文中・後期のものや土師、須恵器、青磁の破片もあった。最下層において曾畑式や格子目押型文及び磨製石斧が発見された。層の厚さは30~40cmである。

3. 純貝層

この区の東端に小範囲に分布するものであって、主要分布範囲はトレンチ外北方にあるらしく、末端がこの区らしい。そして断続しながら第6、7区の純貝層に連結するようである。厚さは約20cmで、貝はマガキが最も多くオキシジミやハイガイも多い。稀にチョウセンハマグリ・ヤマトシジミ・レイシ・スガイ・ウミニナも見られた。無文の縄文後期の大破片と無柄の石鎌及び人骨細片を発見した。

4. 褐色土層

この層は厚さおよそ40cmで、その上部に押型文等を約30片出土した。そのうち半数は押型文に伴うとされている太い条痕を特徴とする土器であり、他に山形押型文、次いで格子目押型文が多い。そしてこれに伴うらしい平底で木葉痕のある厚手の底部が1箇出土したのは注目される。他に曾畑式、細隆起線の轟式が各1片発見された。

5. 桃褐色粘土層

地山の層であるが他の区のような小礫の混在はなかった。遺物は出土しなかった。

(渡辺)

Aトレンチ第6区

第6区と第7区は、Aトレンチのもっとも東端に設定したもので、遺跡の載る舌状台地のちょうど鞍部に当たっているため、第1区とは比高で100cm、第3区とくらべても60cmほど高い。ここでは西より伸びてくる混貝土層とは別に、縄文後期の純貝層が埋積している。ボーリングならびに試掘の結果によると、この貝層はA6、7区から北方および東方にも延び、また南は谷となって遮断されているが、台縁にやはり純貝層の露頭がみられる。これより推定して、この貝層は径20mのサークルをなしているものと思われる。われわれはこれを「東貝塚」と仮称し、曾畑期に築成されたA1区およびBトレンチの第1貝層と区別することにした。

前文したように、東貝塚は縄文後期のものであるが、その表土層には須恵器の破片を包含し、その下土層には縄文前期、早期の土器破片が見出されており、この地区が相当長期間にわたりエクメネとなっていたことを示している。そのため、A6区、7区における堆積状態は大いに編年的興味をひくとともに、貝層の有無によるこの間の自然環境の変化なども当然注意される。

A6区では、表土層・混貝土層・純貝層・貝層下土層・基盤の順で堆積し、各層はそれぞれ北より南へ急傾斜している。これは既述のようにA6区が丘陵の鞍部に当たっているためであろう。A6区の北壁における堆積状態は第19図のとおりである。

第1層（表土層）

茶褐色の腐蝕土であって約20cmのうすい層であり、唐イモ畑として耕作されている。この層には、原史時代の須恵器片が若干包含されていたほか特記するほどのことはない。

第2層（混貝土層）

第1層の下に20～30cmの厚さをもって堆積している。貝殻をまじえているが、混土率が著しく高く、混貝土層というより混貝土層というべき状態であった。貝殻は種類の鑑別が困難なほど微粉となっているが、そのうちハイガイ・ハマグリ・アサリ・マガキ・マテガイ・テングニシだけは確認される。第2層の土器はその90%までが後期鐘ヶ崎式であるが、その包含量はきわめて少ない。

第3層（純貝層）

A6区のほぼ中央から、レンズ状に純貝層が入り、そのままA7区に向ってのびている。貝層はその西端ではきわめてうすく5～10cmであり、東するに従ってその厚さを増し、6区東端では25～30cmとなる。貝層はマガキが主体となり、イワガキ・ハイガイ・マテガイなどのほか第7区に記載すると同じ多種類がみられ、ほかにウマ・シカ、水禽類の鳥骨、魚骨なども採集された。文化遺物としては後期鐘ヶ崎式土器の破片がかなりあり、また7区に接したあたりになると前期轟式の土器破片をも少量みうけた。

第4層（貝層下土層）

貝層下には茶褐色土がかなり厚く堆積し、ここからも土器破片と石器とが出土している。6区西半の発掘によると、この層の比較的上部にあたる地表より70cmの辺りまでは、貝殻条痕文を内外両面に施した轟式土器の破片が黒耀石片とともに比較的多くであるが、地表より70cmの辺りで曾畑式の土器片が唯1点であるが出土した。また-100cmから本層の終わりまでは曾畑式土器のほか、山形押捺文および粗く太い条痕を施した厚手土器の破片がそれぞれ数個ずつ出土し、チャート製の石搔器も1点発掘された。

6区西半つまり7区よりでは、本層の上半部に木炭の小塊がところどころ含まれており、これとともに黒耀石片が10コ以上あり、また文化遺物としては、平行沈線文様の曾畑式土器片、列点文およびみみずばれに似た隆起帯を並列した土器破片、山形押捺文土器片、粗く太い条痕文を青海波状に施した厚手土器片などが混在していた。いずれも小破片であり、出土量もわずかである上、包含層が北から南へ傾斜している関係もあって、各土器の詳細や、相互の層序関係については明言しがたい。注目してよいことは、この層の下部から貝殻条痕文を横走させた轟式土器の破片がかなり発掘されたことであり、わずかの連続山型文土器片、前述した厚手条痕文土器片をともないながらも本層の下底まで深く入っていた。第4層は6区西端、東端いずれにおいても地表から130cmに至って終り、砂礫粘土層へつづいている。

第5層 (基盤)

桃褐色を呈する砂礫粘土層であり、砂礫とくに軽石の混入度が高いため相当堅密である。この層には文化遺物が全くみあたらず、この地域の基盤をなしている。 (可兒)

Aトレンチ第7区

Aトレンチ最東端の本区は、N-S1.5×E-W6.0mで、その堆積状態の概要は第6区と大差ないが、純貝層はずっと厚くなっている。

第1層 (表土層)

第6区に同じである。

第2層 (混貝土層)

前述のように破碎貝層であって西より伸びてきているが、第6区にくらべてさらに薄くなり、ところによっては5cmにとどまっている。種類の鑑別できるものはマガキ・アサリ・ハイガイ・オキシジミ・フトヘナタリぐらいのものであるが、なかでもマガキが多い。これに混って後期の土器片が少量みだせるだけである。この層では、6-7区境界から東へ2mよったところにポケット状の落込みがみられた。これを第1ピットと仮によぶが、ピットは南するに従い深く落込み、その傾斜はN-S15°ぐらいある。ピットの東側は焼灰がなだれこんでいる。ピット内には鐘ヶ崎式土器の破片と無文の土器破片があった。

第3層 (純貝層)

混貝土層につづく純貝層はかなり厚くなり、第1ピットの個所をのぞき50~70cmの厚みで堆積している。貝層はマガキが圧倒的に多かったが、他にイワガキ・ハイガイ・マテガイ・ハマグリ・アサリ・シオフキ・オオノガイ・アワビ・ウネナシトマヤガイ等の二枚貝、アカニシ・テングニシ・イボニシ・フトヘナタリ・イボウミニナ・スガイなどの巻貝のほか、陸産巻貝のカタツムリもみられた。堆積状態良好のところをえらんでリング箱一杯の貝殻を採取し、その比率をしらべた結果は別項のとおりである。またトラフグの下顎骨のほか、種類の同定しがたい小魚骨や魚鱗がかなりあり、さらに貝層のいたるところに炭化物が散布していた。文化遺物としては無文浅鉢の完形品のほか器形を復原しうる後期の土器

が2点あり、また破片も豊富に出土したが、すべて市来式および鐘ヶ崎式にぞくするもので、本層の堆積期を縄文後期として疑いない。また貝層の東端からは、アワビ殻製の垂飾品、サルボオ殻製の貝輪もみつまっている。

この層にもまた2ヶ所にピットがある。一つは第1ピットの下に当り、約50cmの深さで貝層がV字状に落込み、その下端は軽石をまじえた褐色土層にまでくいこんでいる。これを第2ピットとよんでおくが、この中には無文土器の破片と、貝殻縁を施文工具に用いた後期市来式の土器破片がみつまっている。いま一つのピットはごく浅いもので、これを第3ピットと仮称しておく。

第4層（下土層上部）

純貝層の下は、細礫まじりの褐色土層にうつるが、この層は東端でも西端でも地表より80cmからはじまる。そして地表より80~100cmにわたり轟式土器の破片が黒耀石の石屑とともに出土した。ついで地表より120cm辺にも土器破片の包含をみるが、西寄りでは厚手条痕文土器片が石鏃とともに、また東寄りでは山形連続文の土器破片がそれぞれ少量出土している。なおこの層では微量の貝殻を稀にみるものがあつた。

第5層（下土層下部）

砂礫をまじえた褐色土層は地表より145cmで終り、ついで細砂礫混入の砂層に変わる。この層およびそれ以下には、文化遺物は全く包含していない。またカキ・ハイガイが稀にみられたが、なぜ貝殻を包含するかは明白でない。

第6層（基盤）

第6区の第5層に同じ。第7区ではトレンチ西端では地表から180cmからはじまるが、東端では210cmまで掘下げてもこれに達しない。これは、基盤が南から北へ30°傾斜すると同様に、西から東へも傾いているためであろう。これから考えて、基盤は第7区東端のあたりから東へ傾斜し、谷を形成していることが想定される。 (可兒)

B トレンチ第1区

A トレンチ第1区に於いて確認された西貝塚の規模を確かめるべく更に南北にB トレンチが設定された。B トレンチはA 1区4に直交して設定され第1区3.5×2mはA トレンチの南側に当る。B トレンチに於ける層位はA トレンチに於けるものとほぼ同一と考えられたが、傾斜、断絶等を確認する為、更に10cmのレベルを以て掘下げることにした。その結果A トレンチと同じく、次の6層の存在が認められた。

第1層 表土（耕作土）

第2層 貝層（第1貝層）

第3層 礫層

第4層 貝層（第2貝層）

第5層 貝層下土層（黒褐色土層）

第6層 基盤（赤灰色粘土層）

各層とも南へ向って下降する傾斜を示し、その末端は、道路によって切断された崖に露出している。然し各層間には各々傾向の差があり、この点について次に詳述する。

第1層 表土 -30cm

第1層は耕作土であって、その下部は次の貝層に耕作が及んだ為、少量の破碎貝殻片を含んでいる。後期土器片数片が出土した。

第2層 第1貝層 (北-30~35cm, 南-30~55cm)

第2層は大部分純貝層であるが、Aトレンチ寄りの一部は破碎貝層である。南へ寄る程貝層の厚みを増し、貝層も良好となる。出土する土器は縄文文化後期の土器で、貝層下部に纏ったものが多いが、復原可能なものはない。貝層はマガキを主とし、獣骨はシカが多いが、馬の指骨の出土は注意されてよい。魚骨はスズキ、クロダイが顕著である。

第3層 礫層 (北-35~45cm, 南-55~65cm)

第3層は褐色土にぎっしりと礫のつまった礫層で南から約1m付近で非常に厚みを増す。土器は曾畑式土器が出土し、石器は砂岩製打製石器1点が出土した。

第4層 第2貝層 (北-35~65cm, 南-65~80cm)

第4層は純貝層と言えるが、第3層に見られたとほぼ同様な礫が相当多量に包含されている。この礫の中にはカキが付着したものがしばしば発見されるが、このことは貝層中の礫の堆積の原因について、示唆する所大である。又この貝層はトレンチの東南隅で消滅し、貝塚の一端が確認された。土器は曾畑式土器が出土し、殊に貝層最下部、次の第5層に接して復原可能な土器片の群集が見られた。骨角器、石器類の出土は見られない。

自然遺物については、貝類はマガキ・ハイガイ・ハマグリ・マテガイ・カガミガイ・ヤマトシジミ・サルボウ・オウノガイ・アカニシ・ツメタガイ等が見られ、マガキが主体をなす。獣骨はイノシシ・シカが多い。

第5層 貝層下土層 (北65~110cm, 南80~120cm以上)

南端で基盤が急激に下降し、この第5層の下部も確認し得なかった。第5層は非常に希薄な包含状態ながらも、遺物包含層と言うことが出来る。上部10cmは第4層に続き曾畑式土器の包含層で、獣骨も包含されている。更に次の10cmでは、曾畑式土器、細隆起線文土器、楕円押型文土器等が混在している。第5層最下部では格子目押型文土器、条痕文土器が出土した。骨角器は最上部から骨製針1点が出土したのみである。Aトレンチと同じく第5層は多量の軽石を包んでいる。

第6層は赤灰色粘土層で無遺物層であり、基盤と考えられる。

Bトレンチ第1区発掘の結果、第1貝層は更に南へ下降しながら厚みを増して行くことが確認され、又第2貝層は第1区東南部でその縁辺の一部が現れたので、これ以上南に余り延びる可能性はなく、Aトレンチ南側に於ては、ほぼ半径4mの半円形をなす貝層が存在するであろうことが推察された。貝層下土層に於ける各種土器の層序関係については、遺物の出土量が余りに少く、明確な結論を得ることが出来なかった。

猶自然遺物中の貝類に関して、第1貝層の貝類は種類の如何を問わず第2貝層の貝類より小であることが注意された。

Cトレンチ

Aトレンチ第1区3、4の北側、Bトレンチ第2区の西側にCトレンチ(3.5×2.5m)を設定した。本トレンチ設定の目的はAトレンチ発掘によって明瞭となった層序に従って完全な層位掘りを実施するにあった。

発掘の結果、次の7層の層序を確認出来た。

第1層 表土（耕作土）

第2層 貝層（第1貝層）

第3層 礫層

第4層 貝層（第2貝層）

第5層 黒色土層

第6層 黒褐色土層

第7層 赤灰色粘土層

第1層 表土（南-23, 北-40cm）

第1層は耕作土で全体に貝殻の微細な破片を含み、遺物は縄文後期土器片、曾畑式土器細片の他、歴史時代以降のものまで混在していた。

第2層 第1貝層（北-23~-45cm, 南-40~-55cm）

第2層は縄文文化後期土器を包含する貝層で、西へ向って下降し、発掘区の中央部はやや凹みをなして厚さを減じる。西南隅は最も良好な純貝層である。包含される土器は完全に縄文文化後期の土器で、磨消縄文、塗丹土器が注意に上った。その他磨製石器小破片、貝輪片等が出土した。

自然遺物について貝類はマガキ・ハイガイ・アサリ・オキシジミ・ハマグリ・シオフキ・サルボウ・ヤマトシジミ・アカニシ・フトヘナタリ・スガイ・イボウミニナ等でありマガキを主体とする。獣骨はシカ・ウミガメ・小動物・ウシ?等が出土し、魚骨も採集された。又人骨が発見され、頭蓋骨片、下肢骨などである。

第3層 礫層（南-45~55cm, 北-50~80cm）

第3層は褐色土層に多量の礫を含む層で、礫は第2層下部からその存在が認められるが第3層に至って圧倒的に多くなる。曾畑式土器片を多量に包含している。

第4層 第2貝層（南-55~72cm）

第4層は相当多量の礫を含む貝層で、西壁寄りでは南から北へ約2m進んだ所で、貝層は消滅する。即ち本トレンチの西北部には第2貝層は存在せず、礫層がつづいている。

第2貝層は完全な曾畑式土器の包含層で、復原可能な土器片、相当程度復原し得る大破片等が出土した。又石器は、石匕（縦型3, 横型1）半磨製石斧1等が出土し、曾畑式土器に伴う石器がやや明らかにされた。又貝輪片1（サルボウ）が出土した。

第5層 黒色土層（南-72~92cm, 北-80~102cm）

第5層はAトレンチ及びBトレンチ第1区では分離し得なかった層で、この発掘区では土の色が明瞭に異なったので、分離することが出来た。この層の上部では貝層に引つづき曾畑式土器が出土するが、下部では、条痕文土器、細隆起線文土器、楕円押型文土器の破片が出土し、層位の異なることが確認出来た。

第6層 黒褐色土層（南-92~127cm 北-102~132cm）

第6層は軽石を多量に含む土層で本発掘区では時間の都合上完全に発掘し得ず、又遺物も発見し得なかった。

第7層 赤灰色粘土層

第7層は基盤である。

このトレンチの発掘の結果、各層序に含まれる土器の種類はほぼ確認された。又第2貝層即ち曾畑式文化の時期に形成された貝塚は径約10mの小貝塚であることが明らかとなった。この結果この第2貝層を含む貝塚を西貝塚と呼ぶこととした。この貝塚は清野博士発掘地点とは別個の貝塚であり、又この台地上に他にもこの時期の小貝塚が存在するであろうことを推測せしめるものである。

3 曾畑貝塚人骨所見

小片 保

慶応義塾大学講師江坂輝彌氏により提示された、曾畑貝塚より発掘せられた1体の人骨の性別、年齢及びこの人骨の属すべき時期等を推定する機会を得た。以下この人骨所見を述べ、それに就いての知見を論ずる事とする。

1 埋葬様式 (第1図)

本人骨の保存状態は、貝塚人骨の通例として、可成り良好ではあるが、扁平骨は破損され、長骨骨端部の崩壊しているものもある。

本人骨は典型的な仰臥伸展位をとる。各骨の位置よりして、軟部未だに健なる間に埋葬せられた事は確かである。下顎骨を含む頭蓋は少し左側にずれている。これは土圧によって少しく移動したものである。埋葬時に、頭部に空間を作って埋めたという確証はない。

上肢は体軸と略々平行に置かれ、胸骨上に乗っていない。下肢を見ると、足関節の部分が左右極めて接近して置かれている。それに続く足根骨、中足骨及び趾骨が足底側に向って屈曲しており、この部分が左右接近している処を見ると、足関節以下の左右揃えて緊縛されて埋葬された様にも思われる。この様な例は稀に経験する処である。鎖骨肩峰端、従って肩甲骨関節窩の部分が、左右側共に自然の位置より近位方向に移動している。この事は、土壌が狭く掘られ、この空間を、より有効に利用する為に、人為的の作業が行われたと思われる。この様な経験は、古墳時代箱式棺中に埋葬する時、通常の間幅では到底納棺不能な程狭い空間に、極めて巧妙に埋葬している例を屢々経験しているが、時代こそ違え、本人骨も同様と考えて差支えない。

前述の如く、洗骨その他の人骨に対する人為的工作はない。赤色物の塗布、散布その他は見られない。

2 人骨所見

I) 頭蓋 (第1表)

頭蓋縫合の内、主要なる3縫合の癒着状況を見ると、内板は冠状、人字縫合の癒着殆んど完了しているが、矢状縫合のそれは余り進んでいない。外板では部分的に癒着が見られ、冠状縫合では Pars temporalis の部分完了、その他は部分的、矢状縫合では Pars obelica の部分完了、その他部分的に開始、人字縫合では Pars lambdaidea の部分に開始している。その他観察可能な縫合では癒着が開始されず、あるとしても極めて小範囲に止まる。次に歯牙の咬耗状態を見るに、各歯によってその程度が著しく異なり、Broca 氏の第1度より第4度に及ぶ。鉗子咬合型を示し、特に前歯に於いて咬耗度が高く、水平咬耗である。上顎左右第3大臼歯は生前歯槽膿漏によって脱落せるものと思われ、下顎のそれは生前脱落か、先天性欠除か判断に苦しむ。但し、埋状歯牙でない事はレントゲン写真で明確である。歯石も少しく見られる。右上顎第1大臼歯に高度の齲蝕を認める。

A. 上面観 (第2図)

本頭蓋は短頭型 (Brachykran) を示すが、中頭型に近い。頬骨弓の外側方への膨隆が強く、従って Phaenozygie である。Sergi 氏の類五角形に属するものと思われるが、或はこの様な簡単なものでなく、類七角形と言ってよいかも知れぬ。頭頂結節の発達よく、外側方に張り出す。頭頂孔は、Pars obelica の部

分で、少しく右に偏して1個見る。矢状溝状圧痕はかなり著明。

B. 側面観 (第3図)

高頭型 (Hypsikran) を呈し、前頭矢状曲線は前方に膨隆強し。眉間隆起は僅かに見られる程度である。頭頂矢状曲線では、前半に於いて強く屈曲する。後頭のそれでは、上、下鱗共に膨隆が弱い。併し、両者間の屈曲が強い。上側頭線の発達極めて強く、鈍な堤状に後進するが、後頭骨に至らず消失する。左右側に Osepipticum を見る。側頭担面は平坦、中側頭動脈溝が左右側に見られる。頬骨弓は長く、波形をなさぬ。外耳孔楕円形で、外聴道骨瘤は見られぬ。乳様突起よく発達し、表面の粗糙強く、尖端は細く下垂す。根部の外側方への膨隆強し。

C. 底面観 (第4図)

脳頭蓋基底は広い。大後頭孔は垂円形を呈し、後縁正中面上に長さ2mmの突起状の骨増殖を認む。後頭顆は大きく、その関節面上に一稜を作り、前後の2面に分かれる。第3後頭顆はない。顆窩は広く且つ深い。顆管は左側が大きい。乳突切痕、後頭動脈溝は深い。乳突孔は左側に見る。後頭骨底部は広く、咽頭結節は軽度に見られる。旁乳様突起を左右側に認める。口蓋は広型 (Brachystaphylin) を呈し、楕円の一部に近い。横口蓋縫合は少しく前方に弯曲し、門歯縫合を欠く。矢状口蓋隆起は殆どない。口蓋棘強く、口蓋溝を内外共に認める。後鼻棘は強く突出す。

外後頭稜は左側に偏し、この稜の右側で、大後頭孔後縁より後方15mmの処に、長さ8mm、幅4mmの鈍長方形の穿孔があり、その周縁には仮骨形成す。この穿孔をめぐり、13mm、17mmの軸を有する。その長軸が穿孔の長軸に殆ど一致する略々楕円形の陥凹あり、穿孔に向って次第に薄くなる。この部分の内板は、外板の楕円形稜に殆ど一致して薄くなり、穿孔線に続く。これは、先天的の骨欠損か、又は何等かの病的変化によるものと思われ、しかも外後頭稜の屈曲と共に、可成り以前から存在するものと思われる。位置的に見て、生前の人工的穿顱術とは考え難い。勿論死後の加工ではあり得ない。

D. 後面観

尖頭型 (Akrokran) に極めて近い中頭型 (Metriokran) の最高値をとる。但し、幅耳 Bregma 高示数では中頭型 (Metriokran) の最低値をとる。これは一見矛盾しているが、Basion と Porion との距離が大なる為が生じた差異である。全輪廓は家根状を呈し、側頭骨輪廓線は平坦に近く、頭頂骨のそれは外側方へ膨隆している。後頭骨は中等広、後頭坦面は平である。外後頭隆起は Broca 氏の第3度で、それに続く最上、上項線の発達はよくない。下項線は右側に僅かに見られ、左側には明らかでない。乳突後突起も、インカ骨もない。

E. 顔面観 (第5図)

脳頭蓋に比して顔面頭蓋が大きい。頬骨弓幅が著しく大なる為、Kollmann 氏顔示数小さく、顔面低型 (Euryprosop) を示す。同氏上顔示数は上顔面中型 (Mesēn) ではあるが、低型 (Euryēn) に極めて近い値をとっている。Virchow 氏顔示数を見ると、過低型 (Hyperchamaeprosop), 同氏上顔示数は低型 (Chamaeprosopo) である。この様に、本人骨は極めて横に広い顔面像を呈していることがわかる。次に側面角を論ずると、全側面角では顎中型 (Mesognath) で、鼻性側面観では鼻直型 (Orthognath), 齒槽側面角では齒槽前反型 (Prognath) である。この様に、上顎部の前方への突出は目立たぬ。上顎齒槽突起の突出は、矢状面に於いて、齒牙と共に前方へ張り出すゆるやかな弧をえがき、従って齒牙は殆ど垂直に釘植しており、鉗子咬合の形態をとる。

前頭結節は可成り強く膨隆し、Metopismus を欠く。Bregma 隆起は弱い。前頭矢状隆起は軽度に見られ

る。眉間及び眉弓の発達は余り強いとは言えず、眉間は両眉弓をつなぐ面より少しく陥没している。前頭切痕は左右側に1個宛見る。鼻中型 (Mesorrhin) で、鼻骨の穹隆は大きい。前頭鼻骨縫合は殆ど左鼻骨にて形成され、従って、鼻骨間縫合は上部で左側に偏している。梨状口下縁の形態は Bonin 及び二井両氏の第IV型に属す。前鼻棘の発達は弱い。鼻中隔は左側に弯曲する。眼窩口は鈍四角形を示し、眼窩上縁の上下の傾きが小さい。中型 (Mesoconch) であるが、少しく左右が異なる。下眼窩縫合は右側に於いて癒着完了せず。頬骨は極めて大且つ広く、上顎歯槽広 (Brachystaphylin) を示し、歯槽突起大で、犬歯槽隆起は極めて強い。

F. 下顎骨 (第6図)

本骨は大きく、骨体は厚く、且つ高いが、筋附着の粗糙は余り強くない。頤部の突起は強いが、頤隆起の突起は甚しくない。頤結節は左右非対称に存在するが、弱い。頤孔は、第2小白歯と第1大白歯の間に、上下の略々中央部に存在するが、右側に1個、左側に2個ある。右側では大孔の周囲に2個の小孔、左側では大孔の後方に1個の小孔が見られる。各筋窩及び腺窩は浅い。顎舌骨筋線は強く内側に張り出し、左側の方が少しく高度である。下顎枝は広く、大きい。下顎角は外方に突出弱く、且つ外弯を見ない。咬筋粗面及び翼状筋粗面には数条の高まりを見るが、その程度は弱い。下顎小舌は両側にある。下顎孔は両側共に1孔宛ある。筋突起大且つ尖端が鈍で、下顎頸も太い。下顎頭大で、上面の関節面の頂上に長軸に沿った一稜を作る。下顎切痕の幅及び深さには特別の事はなく、形は左右側で異なる。歯槽突起及び下顎底の形態は抛物型に近い。下顎隆起は見られぬ。本下顎骨は男性の特徴を示している。

G. 頭蓋輪廓図

計測値や観察項目のみ論じて、形態その物を具体的に記載する事は困難である。それ故多くの輪廓図によって特徴を論じ、比較に応用する必要がある。

1) 正中矢状輪廓図 (第7図)

Nasion の陥没は軽度、従ってそれに続く眉間も余り突出していない。眉間上窩は現れず、前頭結節の高さで緩く屈曲し、後方では比較的平坦に経過し、Bregma に至る。次で矢状縫合の部分では前半が急屈曲を行うが、この部分の頭蓋の最高点を示す。その前後は平坦に近く、Lambda を越えて下方に行くと、後頭鱗では、Inion で強い屈曲を示し、上、下鱗共に直線的である。頭蓋底部も直線的であって、要するに、脳頭蓋は概ね7面に近いと考えてよい。

次に顔面頭蓋では、全体として Prosthion を頂点とする三角形を示す。その一辺は Nasion と Rhinion, Subnasale と Prosthion を結ぶ線、他の一辺は口蓋を通る一線で、これは Prosthion に至って終わる。最後の一辺は、後頭骨の底部と楔状骨との交点と Nasion を結んだ線によって形成されており、この角の内最も鋭なるは Prosthion の部分である。

2) 地平輪廓図 (第8図)

先ず、Glabella 上地平周径の形態を論じ、次に顔面部に至り、耳眼面と垂直に Nasion を通る面、頬骨上顎縫合の上端、同じく下端を通る面、最後に、前鼻棘を通る面を並写し、これにより諸特徴を検討する。

a) Glabella 上地平周径面

前頭部は決して一面では無く、Glabella を頂点として左右に二面を作る。但し、Glabella は小さき陥凹を作っている。眉弓は、本線が下部を通る為に現れて来ない。後方へ行き側頭窩に落ちる。最小前頭幅は小さい。側頭骨鱗部は少々平坦で、その後方で屈曲し、再び概ね平坦な頭頂骨に移る。後頭鱗は平坦

で中央部に寧ろ陥凹を作る。即ち, Sergi 氏の類五角形 (Pentagonoides) に酷似するが, 寧ろ類七角形と言った方がよいかも知れない。頭蓋は左右非対称のもの多く, これは先天的のものもあるが, 土圧による変形であることも多い。この様な事は発掘人骨には多く見られるものである。

b) Nasion を通る面

Nasion は少しく突出し, 眼窩を超えて頬骨前頭突起が現れるが, これは, 左側の突出がより強く, 且つ右側より外側方に位置していることがわかる。極めて左右非対称である。これは先天的のものか, 土圧によるものか不明。

c) 頬骨上顎縫合の上端を通る面

前方には上顎骨鼻切痕縁が左右側で最も突出している。側方へは傾斜して移行するが, 頬骨に至り前外側方に強く張り出し, 頬骨弓に至り, その外側方への弧状の膨隆は強い。頬骨弓は左右非対称であり, 変形を来している。頬骨弓幅は極めて大である事を知る。

d) 頬骨上顎縫合の下端を通る面

この線全体は少しく後方に移り, 比較的平坦に過ぎるが, 後方へ行くに従って前方へ出て来る。

e) 前鼻棘の先端を通る面

前鼻棘は少しく破損しているが, この部分が最も前方に出ている。上顎骨齒槽突起は側方に張り出し, 後方へ行くと袋状に萎む。

以上の如く, 本頭蓋の各線は正中矢状面に近い処では, 頬骨上顎縫合の上端を通るものが最も前方乃至外側方に張り出しており, 次で前鼻棘先端, Nasion の順となり, Glabella が最も後退している。この様に顔面部の形態は凶形をもって示すと興味ある特徴を示すことがわかる。

f) 下顎骨底面図 (第9図)

下顎底を紙上に置き, 西, 西氏描字法を用いて外, 内面を画けば, 所謂“角頤”を呈し, その後方は弓状をなして進み, 下顎角附近に至る。本図を見ると, 顎舌骨筋線が強く内側に隆起している事がわかり, 左右非対称なるも本下顎骨の特徴を示す。

以上を総括するに, 本頭蓋は熟年期の男性人骨らしく, 然も老年期に近いと考えて差支えないようである。中頭型に近い短頭型である。頭蓋高型を示し, 口蓋は広く, 齒槽突起の発達よく, 言わば原始的であろう。最小前頭幅は小さいにも不拘, それに反して顔面の横径極めて大, 特に頬骨弓幅に於て著しく, 本人骨の特徴をなしている。眼窩は鈍四角形を呈し, 下顎骨は可成り強大, 顎舌骨筋線は強く張り出している。歯牙の咬合型は鉗子状で, 用耗強く, 疾病による脱落を見る。

II) 胴骨

椎骨を見ると, いずれも強大で, 男性の特徴を有す。腰椎下部の椎体前面に軽度の変形性脊椎症を認め, 又, 下部椎体そのものの変形も来している。即ち, 第3より第5に至る腰椎体前縁に突起状の骨増殖があり, 且つ肩平椎体症の症候も見られる。これ等は老人性の疾病として現代日本人に度々見られるものである。その他肋骨, 胸骨は強大であるのみで著しい特徴は見られない (第10図)。

III) 上肢骨

a) 肩甲骨 (第11図, 第2表)

発掘人骨の通例として, 保存不良である。併し, 極めて強大である事は確かである。筋附着部の粗糙

が強く、特に肩甲棘、肩峰の発達が著しく良好である。即ち、棘上窩、棘下窩の深い事は、この部に附着する筋の強大なるを知り、上肢の運動の激しさを知る。肋骨面も弯入強く、肩甲下筋の頑丈さの証拠となる。関節窩もそれにつれて長且つ広く、梨子状を呈す。烏喙突起も大である。

注目すべきは、左側肩峰が骨端線より失われていることである。肩峰は20才前後で癒合することになっているが、本人骨は到底この年令とは思えず、或は外傷によるか、他の原因か、いずれにせよ興味ある症候である。

b) 鎖骨 (第12図, 第3表)

保存はよい。中央断面は丸みを帯びる。胸骨端大きく、関節面は三角形を呈す。肩峰端も大きい。弯曲示数大である。左右側概ね対称型を示す。肩甲骨と共に上肢の運動の激しさを知る。

右側のその下面に見る肋鎖靭帯圧痕が、左側に比し面積が大きく、その胸骨端に近く長径9mm、短径最大3mmの、周縁鈍なる不規則な骨痠を見る。これ骨髓腔に迄達し、周縁には仮骨の形成が著明である。恐らく、陳旧性の骨炎症によって生じたものであろう。

c) 上腕骨 (第13図, 第4表)

余り長くはないが、上、下端は特に強大で、内側上顆の突出が強い。右側が左側より長い。小結節の発達良好。これ肩甲下筋の終止部に当り、運動激しき為と考えられる。結節間溝深し。広背筋及び大胸筋の附着する大結節稜の強さは特筆すべきである。その下の三角筋粗面も粗糙強く、且つ広大である。特にこれは右側に著しい。上腕骨の扁平も認められる。滑車上孔はない。橈骨神経溝は左側に深く、上腕骨捻転強く、骨頭は略々円形。

d) 橈骨 (第14図, 第5表)

長大。上、下端の発達よし。中央の扁平弱いが、骨間縁は鋭利なるも突出は強くない。掌面少しく陥凹するが、背側面は平坦。橈骨祖面は広く且つ粗であり、掌面に向く。関節環状面の高低が目立つ。

e) 尺骨 (第14図, 第6表)

橈骨に伴い長大。上、下端は大きい。中央部の扁平著明ではない。骨間縁の突出は微弱。肘頭尖端は鋭である。尺骨粗面は強くは陥没しない。滑車切痕は大きい。掌面平坦なるも背側面は二溝を作る。茎状突起は頑丈、尺骨頭関節面は腎臓形を呈す。

IV) 下肢骨

a) 骨盤 (第15, 第16図, 第7表)

発掘人骨は孰れも保存不良であり、本例も同様である。特に仙骨は破片となっているが、骨盤全体の形態を知ること出来る。寛骨の高さは特別の事はないが、横に広い。骨盤口横径は大ならざるも腸骨幅が特に大きい。従って閉鎖孔幅が大きい。腸骨翼状傾斜角の計測法は、R.Martin氏の教科書(1928)によって定められている。この方法には少しく疑問があるが、腸骨翼の開き方を示している。本人骨ではこの角が著しく大きく、極めて特殊な形態をとる事が注目される。これは腸骨翼が側方に強く倒れている事を示し、これに附着する筋の強大さを物語っている。下恥骨角の小なるは直ちに男性骨盤である。その他、多くの示数の特殊さは、腸骨翼の傾斜が大なる事によって生ずる当然の結果である。腸骨の後腸骨棘が下方に垂れている事から、大坐骨切痕が楕円の一部分に近い形をとり、狭い。恥骨結合面の隆起、陥没は老年に近い事を物語る。髌臼は大で深い。

b) 大腿骨 (第17図, 第8表)

骨端部が破損されているが、極めて頑丈で、且つ上、下端の発達は良好。彎曲は著しく弱く、直線的である。筋附着部の粗糙強く、軽度の第三転子の形成を見る。骨体中央部は丸く、骨体上、下端の扁平は著しい。上部では超広型 (Hyperplatymēr) であり、頸部短く、頸骨体角は可成り大きい。粗線の発達極めて悪く、柱状をなさぬ。

c) 膝蓋骨 (第18図, 第9表)

本骨も強大。前面の縦溝の発達がよい。底部及び尖部が少しく突出している。中央隆線は左右側共に著明ならず、丘状を呈す。外側関節面が広い。高、広膝蓋骨 (Hohe undbreite Patella) を示す。

d) 脛骨 (第18図, 第10表)

頑丈である。上、下端は極めて発達良好。然るに扁平脛骨の特徴をもっていない。中脛 (Mesoknem) である。ただ、後面上部に軽い一稜を作るが、中央部迄で消失する。即ち、上部では横断面菱形となる。骨幹は前方に彎曲している。ヒラメ筋線は陥没していない。右側前縁下部が一様に緻密質の肥厚を見、この部分の前縁が鈍となる。これ何か外力が加わった為のものかもしれない。総て筋附着部の粗糙強く、脛骨粗面広大、外側に特別の一稜を作る。遠位関節面に続き前面にかけて、蹲踞面を見る。内果の発達よし。

e) 腓骨 (第18図)

近位部が消失して詳細不明なるも強大。略々中央最大径は大きく、特に右側が大きい。脛骨側への彎曲が見られ、前後方向にはない。骨間縁は鋭なるも突出弱し。前縁は鈍、且つ突出は強い。外側面に深溝を作る。腓骨頭及び外果は発達強い。扁平である事は下腿の運動の激しさを想像せしめる。

f) 距骨

これは踵骨と共に強大で、著明なる蹲踞面を有し、脛骨下端と相呼応している。

V) 身長 の 推 定

Pearson 氏身長推定式によれば161.56cmとなり、縄文人男性にしては可成り長身である。

総 括

本人骨の属すべき時期、性別及び推定年令を決定すべき主題に関して種々の検査を行ったのであるが、洪積世人類の如き独特な形態を有するものは別として、我国縄文人では、現代日本人の有する特徴を具備せるものも多くあり、再度その困難さを痛感した。特に縄文式時代の数千年の経過中のどの時期に属するかを知る事は、1体の人骨標本をもってしては殆ど不可能であろう。

現代迄の縄文人の研究は、各時代一括されて論じられている。亦、地方差的研究もなされず、所謂“縄文人”として見做されている。考古学的精査のなされずにいる為に、これ等人骨がどの時期に属するか皆目わからない。1遺跡でも縄文式時代が多くの層位に分かれている事が知られるし、それに属する各期の人骨がある筈である。それ等を一括して、統計的数値により論ずる事は固く戒めらるべきである。本論文にも多くの参考文献を挙げて見たが、あるものを除いては使用出来ないものが多い。思えば人類学者の重大な誤謬であった。仮に比較し得たとしても、集団の平均値と1体の人骨とでは全く意味が異なる事は充分に知られるべきである。翻って、計測値のみで生物を云々するのは極めて危険で、その特徴を表し得たと考えるのは早計である。その意味に於いて、本論文では、頭蓋の図形を画く試みを行った。

本人骨は我国縄文人の特質と言われている形態を有している部位もあるが、現代的要素を有している所もある。仰臥伸展位をとっているが、狭い土壌に押し込められた感がある。併し、各骨は自然の位置にあり、洗骨の風習によったと思われる節はない。足部が禁縛一括されたと思われるが確証は認められない。熟年期の終り頃の男性骨であろう。この年令の推定も、研究そのものは現代人で行われているもので、或は頭蓋縫合の癒着度とか、歯牙の咬耗度とか、恥骨結合面とかの性状で決定しているの、縄文人の生活様式によって遅速があるかも知れず、これ又この決定は想像の域を脱し得ないだろう。加うるに個体差の問題があり、極めて困難なる多くの点を蔵している。男性である事は決定的である。

頭蓋は短頭型に属しており、中頭型に近い。高さは可成り高い。横に広い顔貌を呈している。上顎歯槽突起は甚だ頑丈で、前方へ張り出す弧状を呈している。従って鉗子咬合である。これは縄文人に極めて多い形質である。歯牙は水平に用耗されているし、その程度は著しく強い。咬合線の波状は見られない。可成り固いものを噛んでいた事は明らかなようだ。この歯牙の咬耗度と齶歯、それに生前脱落を見ると可成りの年令であると思うが、左側肩甲骨肩峰が未だ癒着せざる所のみを見れば若年期のものと考え以外はなく、年令推定の困難性を知る。下顎骨も大きく、体高も低くない。筆者は、愛媛県上黒岩洞窟、大分県河原田洞窟の、確実に縄文早期人骨を見ているが、この上、下顎歯槽突起又は部と本人骨は全く様相を異にしている事を確かめている。であるから早期人骨とは考えられない。それ以後に属する事は間違いなさそうである。下顎左第1門歯が生前脱落している。これは歯槽は既に閉鎖しており、恰も抜歯の風習による抜去の如く見ゆるが、歯槽突起の萎縮状態より病的に脱落したものである。

各骨は頑丈、長大で、男性骨を思わせる。肩甲骨、鎖骨、上腕骨は頑強で、上肢の運動を激しく行った事がわかる。又、下肢骨も強大である。併し柱状大腿骨をなさず、脛骨の扁平は著明ではない。縄文人に多い蹲踞面が脛骨、距骨に見られる。骨盤も広大で、筋附着が強かった事を知る。腸骨翼状傾斜角の大なる事が特徴である。下肢の運動激しさを物語る。

次に本人骨は病的変化を多く有している。即ち、頭蓋に於いて、大後頭孔後縁右側近くに、右鎖骨に骨穿孔があること、左肩甲骨肩峰が癒着していないし、右脛骨前縁に丘状の骨肥厚がある事等である。これは食物及びその他の環境によったものかも知れぬが、炎症もあつた事であろうし、外傷も考えられる。

以上の如く一体の人骨に就いて論じたので、極めて不得要領の点が多い。現在我国人類学はこの位の事しかわからぬ。時代の決定は、考古学者に頼らざれば一步も進み得ないし、現在迄の人類学者の業績は殆ど全部ほぐして各層位に分けて、その各々の人骨の記載を行わなければならぬであろう。日本人の形質は歴史時代に入ってから顕著に変動しつつ、あると言う。この問題に関してもより一層の研究が必要であろう。況や、幾千年の間といわれる縄文式時代には変動があるに違いなく、それでは、どの古き特徴がどの様に受け継がれるか、どの様に変動を受けるかを決定する必要があるだろう。この意味に於いて人類学は一大転換期にあると思うし、転換せねばならぬ時期の様にも思われる。

稿を終えるに臨み、本人骨を研究に提供され、且つ種々の示唆を賜わった江坂輝彌氏に深甚なる謝意を表す。

参考文献

1. 阿部英世, 1955, 現代九州人大腿骨の人類学的研究, 人類学研究, 第2巻, 301頁
2. 荒瀬進, 1933, 現代朝鮮人大腿骨の人類学的研究(第1報告), 人類学雑誌, 第48巻, 第1附録, 1頁

3. 同上, 同上, 同上 (第2報告) 同上, 同上, 同上, 68頁
4. 福田佐, 1961, 関東地方人腓骨の人類学的研究 計測篇, 東京慈恵医科大学雑誌, 第76巻, 1頁
5. 林幹雄, 1957, 山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土弥生式時代人骨骨盤の人類学的研究, 人類学研究, 第4巻, 375頁
6. 平井隆, 田幡丈夫, 1928, 現代日本人々骨の人類学的研究 第3章下肢骨に就いて, 人類学雑誌, 第43巻, 第4附録
7. 平田和生, 1958, 鹿児島県大島郡与論島々民の下肢骨の研究, 人類学研究, 第5巻, 263頁
8. 鋳鍋勝登, 1955, 九州人下腿骨の人類学的研究, 人類学研究, 第2巻, 1頁
9. 石沢命達, 1931, 吉胡貝塚人骨の人類学的研究第3下肢骨, 人類学雑誌, 第46巻, 第1附録
10. 今道四方爾, 1934, 太田貝塚人々骨の人類学的研究 第2部下肢骨の研究, 人類学雑誌, 第49巻, 第1附録
11. 伊藤泰照, 1954, 九州人骨盤の人類学的研究, 人類学研究, 第1巻, 420頁
12. 城一郎, 1938, 古墳時代日本人々骨の人類学的研究, 第1, 2, 3部, 人類学輯報, 第1輯, 1, 173, 245頁
13. 金関丈夫, 永井昌文, 牛島陽一, 財津博之, 1959, 山口県神玉村土井ヶ浜発掘の人骨に就いて, 解剖学雑誌, 第30巻, 9頁
14. 金高勘次, 1928, 吉胡貝塚人々骨の人類学的研究 第1部頭蓋骨の研究, 人類学雑誌, 第43巻, 第6附録
15. 加藤守男, 原田遼二, 1960, 関東地方人膝蓋骨の人類学的研究, 東京慈恵医科大学解剖学教室業績集, 第21輯, 883頁
16. 清野謙次, 宮本博人, 1926, 津雲貝塚人々骨の人類学的研究 第2部頭蓋骨の研究, 人類学雑誌, 第41巻, 95頁, 151頁
17. 清野謙次, 平井隆, 1928, 津雲貝塚人々骨の人類学的研究 第3部上肢骨の研究, 人類学雑誌, 第43巻, 第3附録
18. 同上, 同上, 同上第4部下肢骨の研究, 同上, 第4附録
19. 三橋公平, 山口敏, 1961, 大岬 (宗谷) 出土人骨の人類学的研究1, 下顎骨, 札幌医学雑誌, 第19巻, 268頁
20. 宮本博人, 1924, 現代日本人々骨の人類学的研究 第1部頭蓋骨の研究, 人類学雑誌, 第39巻, 307頁
21. 同上, 1925, 同上第2部上肢骨の研究, 同上, 第40巻, 219頁
22. 同上, 1927, 同上第3部骨盤の研究, 同上, 第42巻, 192頁, 241頁
23. 溝口静男, 1957, 現代九州日本人前腕骨の人類学的研究, 人類学研究, 第4巻, 237頁
24. 森田茂, 1950, 関東地方人頭蓋骨の人類学的研究, 東京慈恵医科大学解剖学教室業績集, 第3輯, 1頁
25. 中野哲太郎, 1958, 鹿児島県大島郡喜界ヶ島々民頭骨の研究, 人類学研究, 第5巻, 189頁
26. 二井一馬, 1930, 日本人鼻の研究補遺 (其4) 梨子状口下縁に就いて, 十全会雑誌, 第35巻, 622頁
27. 西成甫, 西謙一郎, 1928, 頤形成に関する知見補遺, 解剖学雑誌, 第1巻, 36頁
28. 大場信次, 1950, 日本人大腿骨の人類学的研究 (計測篇), 東京慈恵医科大学解剖学教室業績集, 第3輯, 1頁
29. 同上, 同上, 同上 (形態篇) 同上, 同上, 1頁
30. 同上, 同上, 関東地方人大腿骨の人類学的研究, 同上, 同上, 1頁
31. 小片保, 大賀美利雄, 梅田康之, 1955, 頤部特異なる古墳人下顎骨, 鳥取大学解剖学教室業績集, 第2輯, 155頁
32. 大堀正俊, 1958, 山口県土井ヶ浜発掘弥生式前期人骨の下顎骨に就いて, 人類学研究, 第5巻, 87頁
33. 大山秀高, 1959, 鹿児島県大島郡与論島々民頭骨の研究, 人類学研究, 第3巻, 396頁
34. 専頭時義, 1957, 現代九州日本人上腕骨の人類学的研究, 第4巻, 273頁
35. 芥沢長介, 1961, 石器時代の日本, 236頁, 築地書館, 東京
36. 鈴木信夫, 1961, 関東地方人脛骨の人類学的研究, 東京慈恵医科大学雑誌, 第75巻, 2638頁
37. 鈴木尚他, 1956, 鎌倉材木座発見の中世遺跡とその人骨, 5頁, 日本人類学会編
38. 田畑晋作, 1958, 山口県土井ヶ浜弥生前期遺跡発掘人骨の脊椎骨, 人類学研究, 第5巻, 393頁
39. 田畑丈夫, 1928, 津雲貝塚人々骨の人類学的研究 第5部骨盤骨の研究, 人類学雑誌, 第43巻, 第7附録
40. 同上, 1929, 吉胡貝塚人々骨の人類学的研究 第2部骨盤骨の研究, 人類学雑誌, 第44巻, 第4附録

- 41. 恒松洋二郎, 1957, 現代九州人脊椎の人類学的研究, 人類学研究, 第4巻, 302頁
- 42. 牛島洋一, 1954, 佐賀県東背振郡三津遺跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究, 人類学研究, 第1巻, 273頁
- 43. 米須清一, 1952, 日本人寛骨の人類学的研究, 東京慈恵医科大学解剖学教室業績集, 第6輯, 1頁
- 44. 財津博之, 1929, 山口県土井ヶ浜遺跡発掘弥生式前期人骨の四肢長骨に就いて, 人類学研究, 第3巻, 320頁

編者註

人骨は新潟大学医学部において保管されている。なお、1994年7月から8月にかけて個人住宅建設に伴う緊急発掘調査において、古墳時代の土壌墓が検出され、伸展葬の女性人骨(20代から30代前半)が出土した。当該土壌墓は出土状況が1959年調査の土壌墓と極めて類似していることから、下記の文献で指摘されているように小片氏報告人骨は古墳時代のものである可能性が高い。

高木恭二・木下洋介 2002「曾畑遺跡(貝塚)」『新宇土市史』資料編2 宇土市

曾畑貝塚人骨所見 附表

第1表 頭蓋骨計測値

| 番号 | 計測項目及び示数 | 数値 |
|-------------|-------------|--------|
| 1 | 頭蓋最大長 | 179 |
| 5 | 頭蓋底長 | 106 |
| 7 | 大後頭孔長 | 32 |
| 8 | 頭蓋最大幅 | 145 |
| 9 | 最小前頭幅 | 89 |
| 11 | 両耳幅 | 136 |
| 12 | 最大後頭幅 | 106 |
| 17 | バジオンブレグマ高 | 142 |
| 20 | 耳ブレグマ高 | 117 |
| 23 | グラベラ上地平周径 | 515 |
| 24 | 横弧長 | 331 |
| 25 | 正中矢状弧長 | 377 |
| 26 | 正中矢状前頭弧長 | 123 |
| 27 | 正中矢状後頭弧長 | 139 |
| 28 | 正中矢状後頭弧長 | 116 |
| 28(1) | 後頭骨正中矢状上鱗弧長 | 61 |
| 28(2) | 後頭骨正中矢状下鱗弧長 | 55 |
| 29 | 正中矢状前頭弧長 | 113 |
| 30 | 正中矢状後頭弧長 | 119 |
| 31 | 正中矢状後頭弧長 | 94 |
| 31(1) | 後頭骨正中矢状上鱗弧長 | 58 |
| 31(2) | 後頭骨正中矢状下鱗弧長 | 55 |
| 32(1) | 前頭傾斜角 | 63 |
| 32(5) | 前頭骨彎曲角 | 141 |
| 33(1) | ラムダイニオン角 | 86 |
| 33(4) | 後頭屈曲角 | 123 |
| 34 | 大後頭傾斜角 | -10 |
| 38 | 頭蓋容量 | 1460 |
| 8/1 | 頭蓋長幅示数 | 81.01 |
| 17/1 | 頭蓋長厚示数 | 79.33 |
| 17/8 | 頭蓋幅高示数 | 97.93 |
| 20/1 | 長耳ブレグマ高示数 | 65.36 |
| 20/8 | 幅耳ブレグマ高示数 | 80.69 |
| 16/7 | 大後頭孔示数 | 90.61 |
| 9/10 | 横前頭示数 | 80.18 |
| 9/8 | 横前頭頂示数 | 61.38 |
| 27/26 | 矢状前頭頂示数 | 111.01 |
| 28/26 | 矢状前頭後頭示数 | 94.31 |
| 28/27 | 矢状頭頂後頭示数 | 83.45 |
| 29/26 | 矢状前頭示数 | 91.87 |
| 30/27 | 矢状頭頂示数 | 85.61 |
| 31/28 | 矢状後頭示数 | 81.03 |
| 31(1)/28(1) | 後頭骨上葉彎曲示数 | 95.08 |
| 40 | 顔長 | 100 |
| 43 | 上顔幅 | 106 |
| 44 | 両眼幅 | 99 |
| 45 | 頬骨弓幅 | 145 |
| 46 | 中顔幅 | 110 |
| 47 | 顔高 | 119 |
| 48 | 上顔高 | 73 |
| 49(a) | 眼間幅 | 20 |
| 50 | 前眼窩間幅 | 17 |
| 51 | 眼窩幅 | 42 |
| 52 | 眼窩高 | 35 |
| 54 | 鼻幅 | 27 |
| 55 | 鼻高 | 55 |
| 57 | 鼻骨最小幅 | 8 |
| 57(1) | 鼻骨最大幅 | 15 |
| 60 | 上顎齒槽長 | 58 |
| 61 | 上顎齒槽幅 | 70 |
| 62 | 口蓋長 | 45 |
| 63 | 口蓋幅 | 40 |
| 63(2) | 前口蓋幅 | 32 |
| 65 | 下顎小頭幅 | 129 |
| 66 | 下顎角幅 | 103 |
| 68 | 下顎骨長 | 104 |
| 69 | 頤高 | 30 |
| 69(1) | 下顎骨体高 | 34 |
| 69(3) | 下顎骨体高 | 15 |
| 70 | 下顎骨体厚 | 61 |
| 70(3) | 下顎骨体厚 | 14 |
| 71 | 下顎枝幅 | 37 |
| | | 35 |

| 番号 | 計測項目及び示数 | 数値 |
|-------------|-------------|--------|
| 71(1) | 下顎切痕幅 | 32 |
| 72 | 全側面角 | 83 |
| 73 | 鼻側面角 | 86 |
| 74 | 齒槽側面角 | 76 |
| 79 | 下顎枝角 | 121 |
| 47/45 | コルマン氏顔示数 | 82.07 |
| 47/46 | ウイルヒョウ氏顔示数 | 107.21 |
| 48/45 | コルマン氏上顔示数 | 50.37 |
| 48/46 | ウイルヒョウ氏上顔示数 | 66.36 |
| 52/51 | 眼窩示数 | 80.95 |
| 50/44 | 眼窩間示数 | 17.17 |
| 54/55 | 鼻示数 | 49.09 |
| 61/60 | 上顎齒槽示数 | 120.69 |
| 63/62 | 口蓋示数 | 88.89 |
| 66/65 | 下顎骨幅示数 | 79.84 |
| 71/70 | 下顎枝示数 | 61.67 |
| 45/8 | 横頭蓋顔面示数 | 100.00 |
| 9/43 | 前頭両眼窩示数 | 83.96 |
| 9/45 | 頬骨弓前頭示数 | 61.38 |
| 66/45 | 頬骨弓下顎示数 | 71.03 |
| 57/57(1) | 横鼻骨示数 | 53.33 |
| 69(3)/69(1) | 下顎骨体高厚示数 | 44.12 |
| 70(3)/71(1) | 下顎切痕示数 | 43.75 |

註：番号は R.Martin 氏の教科書 (1928) による。数値は mm、度、及び示数は無名数。角項の数値の上段は右側、下段は左側を表す。尚、記入なき側は破損の為に計測不能なるもの。

第2表 肩甲骨計測値

| 番号 | 計測項目及び示数 | 数値 |
|-------|----------|-------|
| 2 | 形態学的長 | 104 |
| 3 | 腋窩縁長 | 135 |
| 8 | 棘基底長 | 85 |
| 9 | 肩峰最大幅 | 27 |
| 10 | 肩峰長 | 46 |
| 11 | 烏喙突起最大長 | 49 |
| 12 | 関節窩長 | 38 |
| 14 | 関節窩深 | 5 |
| 16 | 腋窩縁棘角 | 54 |
| 17 | 腋窩縁関節角 | 136 |
| 19 | 棘棘下角 | 79 |
| 21 | 棘関節角 | 83 |
| 13/12 | 関節窩長幅示数 | 78.97 |
| 14/12 | 関節窩彎曲示数 | 13.16 |

第3表 鎖骨計測値

| 番号 | 計測項目及び示数 | 数値 |
|-----|----------|-------|
| 1 | 最大長 | 149 |
| 2 | 骨体彎曲高 | 13 |
| 3 | 骨体彎曲弦長 | 108 |
| 4 | 中央垂直径 | 12 |
| 6/1 | 長厚示数 | 26.85 |
| 4/5 | 断面示数 | 92.31 |
| | | 92.31 |

第4表 上腕骨計測値

| 番号 | 計測項目及び示数 | 数値 |
|-------|----------|-------|
| 1 | 最大長 | 308 |
| | | 305 |
| 2 | 全長 | 303 |
| | | 302 |
| 3 | 上端幅 | 52 |
| | | 52 |
| 4 | 下端幅 | 66 |
| | | 66 |
| 5 | 中央最大幅 | 23 |
| | | 23 |
| 6 | 中央最小幅 | 17 |
| | | 17 |
| 7a | 中央周 | 69 |
| | | 69 |
| 8 | 頭周 | 141 |
| | | 143 |
| 9 | 頭最大横径 | 42 |
| | | 42 |
| 10 | 滑車幅 | 22 |
| | | 22 |
| 11 | 小頭幅 | 18 |
| | | 18 |
| 12a | 滑車及び小頭幅 | 40 |
| | | 41 |
| 13 | 滑車深 | 27 |
| | | 27 |
| 14 | 肘頭窩幅 | 24 |
| | | 24 |
| 15 | 肘頭窩深 | 10 |
| | | 10 |
| 16 | 顆骨体角 | 84 |
| | | 84 |
| 17 | 頭骨体角 | 44 |
| | | 44 |
| 18 | 上腕骨捻轉 | 156 |
| | | 156 |
| 18a | 捻轉角 | 152 |
| | | 152 |
| 6/5 | 骨体断面示数 | 73.91 |
| | | 73.91 |
| 7/1 | 長厚示数 | 20.13 |
| | | 20.33 |
| 9/10 | 頭断面示数 | 89.36 |
| | | 87.50 |
| 11/4a | 滑車上顎示数 | 33.33 |
| | | 33.33 |

第5表 橈骨計測値

| 番号 | 計測項目及び示数 | 数値 |
|------|----------|-----|
| 1 | 最大長 | 243 |
| | | 243 |
| 1a | 小頭粗面間距離 | 33 |
| | | 33 |
| 2 | 生理的長 | 231 |
| | | 231 |
| 3 | 最小周 | 43 |
| | | 43 |
| 4 | 骨体横径 | 16 |
| | | 16 |
| 4a | 骨体中央横径 | 16 |
| | | 16 |
| 4(1) | 小頭横径 | 25 |
| | | 25 |
| 4(2) | 頸横径 | 13 |
| | | 13 |
| 5 | 骨体矢状径 | 12 |
| | | 12 |
| 5a | 骨体矢状径 | 12 |
| | | 12 |
| 5(1) | 小頭矢状径 | 26 |
| | | 26 |
| 5(2) | 頸矢状径 | 15 |
| | | 15 |
| 5(3) | 小頭周 | 80 |
| | | 80 |
| 5(4) | 頸周 | 45 |
| | | 45 |
| 5(5) | 骨体中央周 | 44 |
| | | 44 |

| 番 号 | 計測項目及び示数 | 数 値 |
|-------|----------|-------|
| 5 (6) | 下端頸 | 36 |
| | | 36 |
| 6 | 骨体弯曲 | 1.64 |
| | | 2.13 |
| 7 | 頸骨体角 | 166 |
| | | 165 |
| 7b | 矢状頸体角 | 170 |
| | | 169 |
| 8 | 粗面位置角 | 49 |
| | | 50 |
| 3/2 | 長厚示数 | 18.61 |
| | | 18.61 |
| 5/4 | 骨体断面示数 | 75.00 |
| | | 75.00 |

第6表 尺骨計測値

| 番 号 | 計測項目及び示数 | 数 値 |
|-------|---------------|--------|
| 1 | 最大長 | 263 |
| | | 263 |
| 2 | 生理的長 | 233 |
| | | 234 |
| 2 (1) | 肘頭小頭長 | 258 |
| | | 259 |
| 3 | 尺骨周 | 38 |
| | | 38 |
| 4 | 前後骨体弯曲 | 2.38 |
| | | 2.38 |
| 5 (1) | 上関節高 | 40 |
| | | 41 |
| 5 (2) | 上腕関節面高 | 29 |
| | | 30 |
| 6 | 肘頭幅 | 29 |
| | | 30 |
| 6 (1) | 上尺骨幅 | 23 |
| | | 23 |
| 7 (1) | 肘頭烏啄突起間距離 | 27 |
| | | 28 |
| 9 | 烏啄突起橈骨側関節半の前幅 | 7 |
| | | 8 |
| 11 | 尺骨前後径 | 15 |
| | | 15 |
| 13 | 尺骨上横径 | 21 |
| | | 22 |
| 15 | 尺骨関節角 | 85 |
| | | 84 |
| 15 a | 関節骨体角 | 22 |
| | | 25 |
| 15 b | 骨体上端屈曲角 | 166 |
| | | 167 |
| 3/2 | 長厚示数 | 16.31 |
| | | 16.24 |
| 7/6 | 肘頭深示数 | 134.78 |
| | | 130.43 |
| 8/6 | 肘頭高示数 | 95.65 |
| | | 95.65 |
| 5/2 | 肘頭頂高示数 | 1.29 |
| | | 1.71 |
| 9/10 | 烏啄突起橈骨側関節半示数 | 70.00 |
| | | 72.73 |
| 11/12 | 骨体断面示数 | 93.75 |
| | | 93.75 |
| 13/14 | 扁平示数 | 87.50 |
| | | 91.67 |

第7表 骨盤計測値

| 番 号 | 計測項目及び示数 | 数 値 |
|-------|----------|-----|
| 1 | 骨盤高 | 201 |
| | | 201 |
| 2 | 最大骨盤幅 | 284 |
| | | |
| 4 | 寛骨深 | 171 |
| | | |
| 5 | 前上棘幅 | 242 |
| | | |
| 5 (1) | 前下棘幅 | 119 |
| | | |
| 6 | 後上棘幅 | 75 |
| | | |
| 7 | 寛骨白幅 | 113 |
| | | |
| 9 | 腸骨高 | 131 |
| | | 132 |
| 10 | 腸骨翼高 | 102 |
| | | 103 |
| 11 | 腸骨窩深 | 10 |
| | | 10 |
| 12 | 腸骨幅 | |
| | | 160 |

| 番 号 | 計測項目及び示数 | 数 値 |
|-------|----------|--------|
| 13 | 腸骨翼幅 | 90 |
| | | 90 |
| 14 | 寛骨白恥骨縫合幅 | |
| | | 119 |
| 15 | 坐骨高 | 81 |
| | | 79 |
| 17 | 恥骨長 | 88 |
| | | 96 |
| 18 | 恥骨結合高 | 34 |
| | | |
| 19 | 恥骨結合区域幅 | 37 |
| | | |
| 20 | 閉鎖孔長 | 50 |
| | | |
| 22 | 寛骨白最大径 | 55 |
| | | 57 |
| 24 | 骨盤上口横径 | 123 |
| | | 116 |
| 25 | 骨盤上口斜径 | |
| | | |
| 27 | 骨盤下口横径 | 101 |
| | | |
| 28 | 小骨盤側高 | 99 |
| | | 118 |
| 29 | 小骨盤前高 | 117 |
| | | 120 |
| 30 | 小骨盤直高 | 122 |
| | | |
| 33 | 下恥骨角 | 70 |
| | | 70.77 |
| 1/2 | 骨盤幅高示数 | 70.77 |
| | | 141.29 |
| 2/1 | 骨盤幅示数 | 141.29 |
| | | 74.00 |
| 21/20 | 閉鎖孔長幅示数 | |
| | | |
| 24/2 | 骨盤横示数 | 43.31 |
| | | |
| 12/10 | 腸骨示数 | 105.53 |
| | | |
| 17/4 | 恥骨骨示数 | 52.63 |
| | | |
| 4/1 | 寛骨示数 | 84.58 |
| | | 40.58 |
| 15/1 | 坐骨示数 | 39.30 |
| | | |

第8表 大腿骨計測値

| 番 号 | 計測項目及び示数 | 数 値 |
|--------|----------------|-----|
| 1 | 最大長 | 429 |
| | | 428 |
| 2 | 所謂自然位に於ける大腿骨全長 | 427 |
| | | 426 |
| 3 | 最大轉子長 | 422 |
| | | 421 |
| 4 | 所謂自然位に於ける轉子長 | 416 |
| | | 415 |
| 5 | 骨幹長 | 345 |
| | | 345 |
| 6 | 骨体中央矢状径 | 29 |
| | | 28 |
| 7 | 骨体中央横径 | 29 |
| | | 30 |
| 9 | 骨体上横径 | 36 |
| | | 35 |
| 10 | 骨体上矢状径 | 26 |
| | | 26 |
| 11 | 最小骨体下矢状径 | 30 |
| | | 30 |
| 13 | 上幅 | 92 |
| | | 91 |
| 13 (1) | 下端長 | 27 |
| | | 27 |
| 14 a | 後頸及び頭長 | 58 |
| | | 58 |
| 14 b | 前頸軸方向に於ける頭長 | 33 |
| | | 33 |
| 14 c | 頸長 | 34 |
| | | 34 |
| 15 | 頸垂直径 | 33 |
| | | 33 |
| 17 | 頸周 | 105 |
| | | 105 |
| 18 | 頭垂直径 | 48 |
| | | 48 |
| 19 | 頭横乃至頭矢状径 | 47 |
| | | 47 |
| 20 | 頭周 | 150 |
| | | 150 |

| 番 号 | 計測項目及び示数 | 数 値 |
|---------|----------|--------|
| 21 | 上顆幅 | 83 |
| | | 83 |
| 21 a | 内顆前投影幅 | 44 |
| | | 44 |
| 21 b | 外顆前投影幅 | 38 |
| | | 38 |
| 23 | 外顆最大長 | 67 |
| | | 66 |
| 24 | 内顆最大長 | 64 |
| | | 63 |
| 24 a | 内顆投影の深 | 63 |
| | | 62 |
| 25 | 外顆後高 | 36 |
| | | 35 |
| 26 | 内顆後高 | 42 |
| | | 41 |
| 27 | 骨体弯曲 | 2.19 |
| | | 1.94 |
| 28 | 捻轉角 | 20 |
| | | 20 |
| 29 | 頸骨体角 | 125 |
| | | 126 |
| 30 | 顆骨体角 | 85 |
| | | 85 |
| 8/2 | 長厚示数 (a) | 21.55 |
| | | 21.60 |
| 8/5 | 長厚示数 (b) | 26.67 |
| | | 26.67 |
| 6+7/2 | 頭丈示数 | 13.58 |
| | | 13.62 |
| 6/7 | 骨体中央断面示数 | 100.00 |
| | | 93.33 |
| 10/9 | 上骨体断面示数 | 72.22 |
| | | 74.29 |
| 11/6 | 下半骨体矢状示数 | 103.45 |
| | | 107.14 |
| 12/7 | 下半骨体横示数 | 124.14 |
| | | 120.00 |
| 11/12 | 膝窩示数 | 83.33 |
| | | 83.33 |
| 16/15 | 頸横断面示数 | 96.97 |
| | | 96.97 |
| 19/18 | 頭横断面示数 | 97.92 |
| | | 97.92 |
| 19+18/2 | 頭頭丈示数 | 22.25 |
| | | 22.30 |
| 14/2 | 頸長示数 | 15.69 |
| | | 15.73 |
| 22/1 | 顆示数 | 79.52 |
| | | 79.52 |
| 7/21 | 上顆骨体幅示数 | 34.94 |
| | | 36.14 |
| 21/5 | 上顆骨体長示数 | 24.06 |
| | | 24.06 |
| 25/22 | 外顆高幅示数 | 54.55 |
| | | 53.03 |

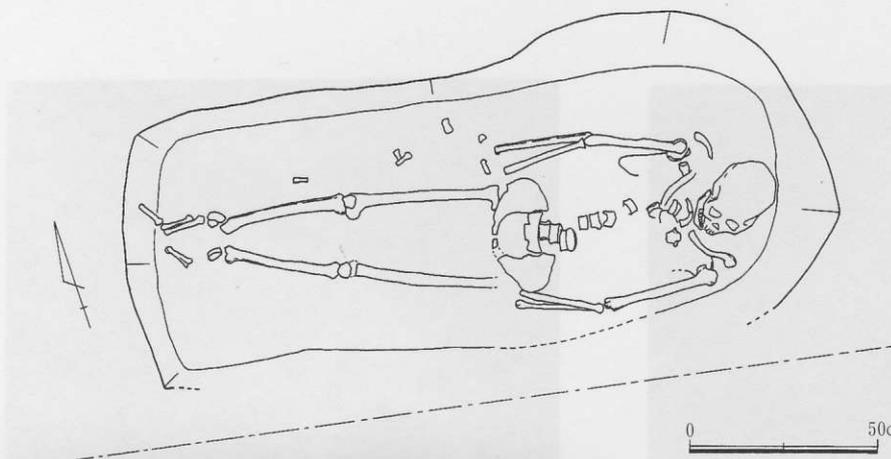
第9表 膝蓋骨計測値

| 番 号 | 計測項目及び示数 | 数 値 |
|------|----------|-------|
| 1 | 最大値 | 43 |
| | | 44 |
| 2 | 最大幅 | 47 |
| | | 47 |
| 3 | 最大厚 | 20 |
| | | 20 |
| 4 | 関節面高 | 32 |
| | | 32 |
| 5 | 内側関節面幅 | 20 |
| | | 21 |
| 6 | 外側関節面幅 | 29 |
| | | 30 |
| 1/※ | 膝蓋骨高示数 | 5.51 |
| | | 5.50 |
| 2/※※ | 膝蓋骨幅示数 | 56.63 |
| | | 56.63 |
| 1/2 | 膝蓋骨高幅示数 | 91.49 |
| | | 93.62 |

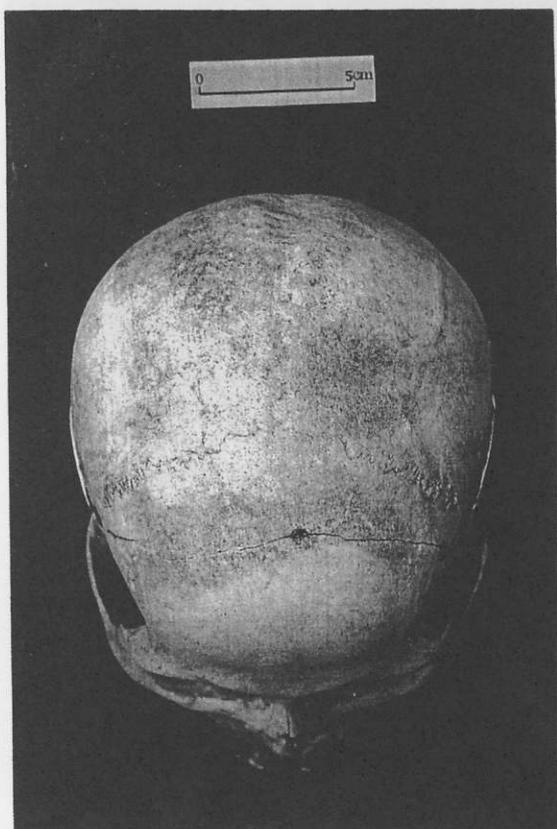
※ 大腿骨長+脛骨長
 ※※ 大腿骨上顆幅 (Nr. 21)

第10表 脛骨計測値

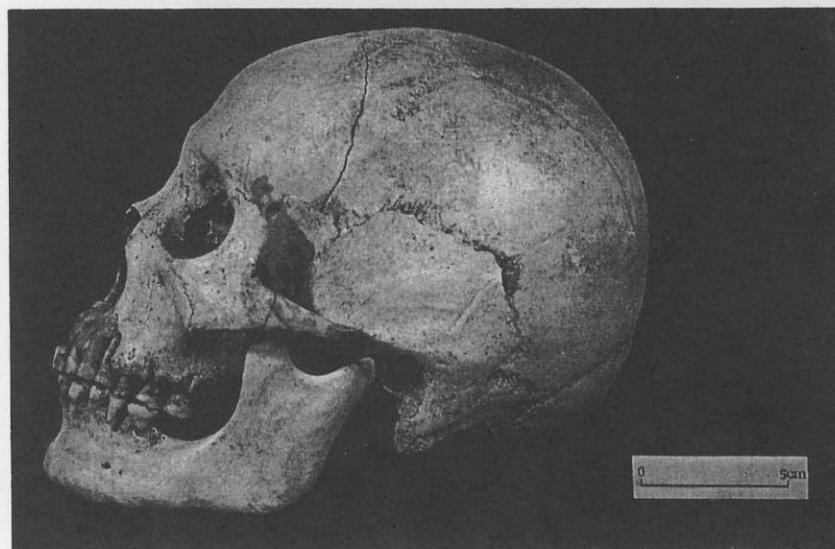
| 番 号 | 計測項目及び示数 | 数 値 |
|---------|------------------|-------|
| 1 | 脛骨全長 | 344 |
| | | 346 |
| 1 a | 脛骨最大長 | 351 |
| | | 354 |
| 1 b | 脛骨長 | 343 |
| | | 342 |
| 2 | 顆距間長 | 328 |
| | | 326 |
| 3 | 最大上端幅 | 80 |
| | | 79 |
| 3 a | 上内関節面幅 | 40 |
| | | 39 |
| 3 b | 上外関節面幅 | 35 |
| | | 34 |
| 4 | 脛骨粗面の高さに於ける最大矢状径 | 51 |
| | | 50 |
| 4 a | 上内関節面深 | 50 |
| | | 49 |
| 4 b | 上外関節面深 | 41 |
| | | 40 |
| 5 | 脛骨粗面の高さに於ける最小横径 | 48 |
| | | 47 |
| 6 | 最大下端幅 | 54 |
| | | 54 |
| 7 | 下端矢状径 | 46 |
| | | 46 |
| 8 | 中央最大径 | 30 |
| | | 29 |
| 8 a | 栄養孔部矢状径 | 33 |
| | | 34 |
| 9 | 中央横径 | 21 |
| | | 20 |
| 9 b | 栄養孔部横径 | 23 |
| | | 23 |
| 10 | 骨体周 | 81 |
| | | 79 |
| 10 a | 栄養孔の高さに於ける骨体周 | 91 |
| | | 91 |
| 11 | 脛骨弯曲 | 1.87 |
| | | 1.87 |
| 12 | 後傾角 | 12 |
| | | 12 |
| 13 | 傾斜角 | 7 |
| | | 7 |
| 14 | 脛骨捻轉 | 17 |
| | | 17 |
| 9/8 | 中央断面示数 | 70.00 |
| | | 68.97 |
| 9 a/8 a | 脛示数 | 69.70 |
| | | 67.65 |
| 10 b/1 | 長厚示数 | 22.41 |
| | | 21.90 |



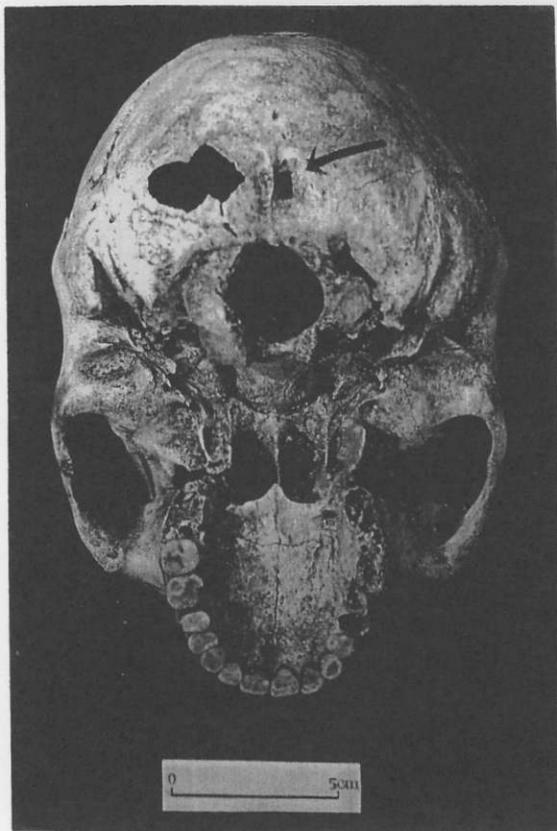
第1図 曾畑貝塚出土人骨
(S = 1 / 20)



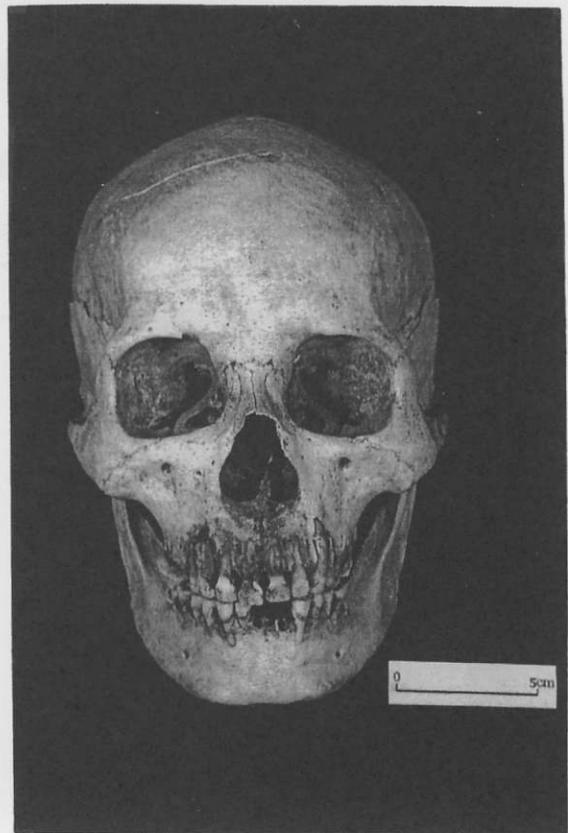
第2図 頭蓋上面観



第3図 頭蓋左側面観



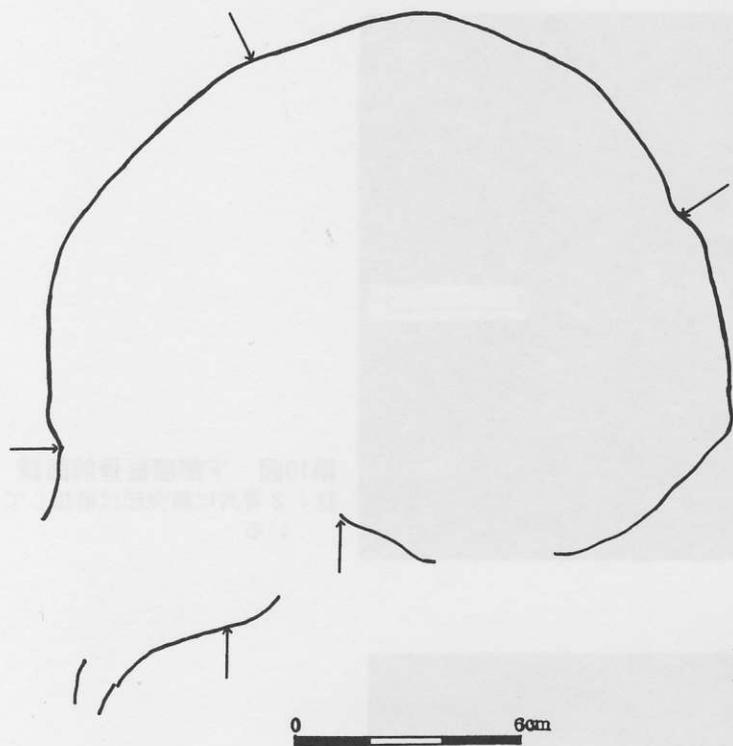
第4図 頭蓋底面観
註：矢印は後頭骨の穿孔部位を示す



第5図 頭蓋顔面観

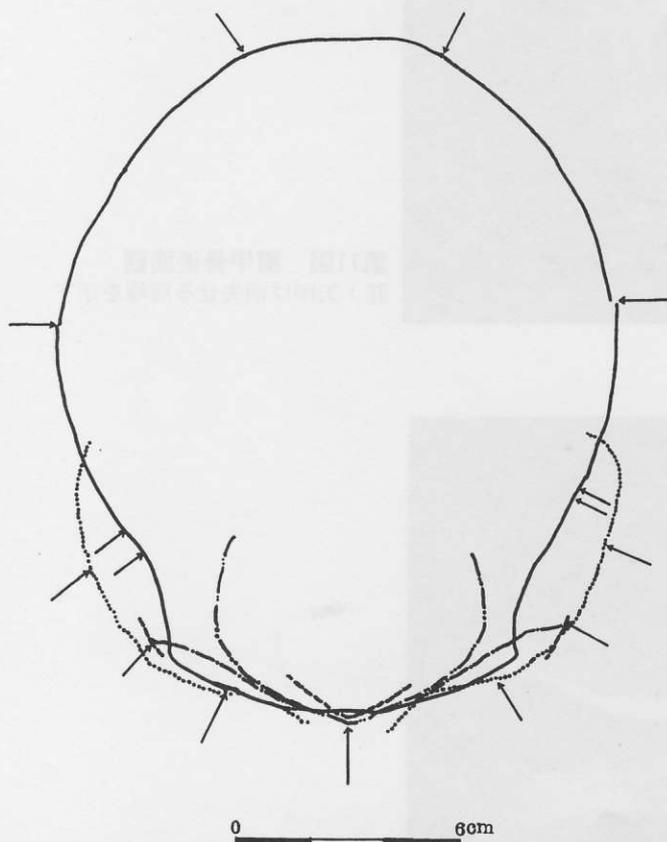


第6図 下顎骨上面観

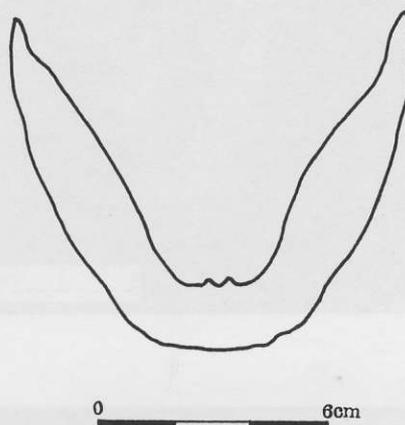


第7図 正中矢状匡廓線図

註：→骨結合部を示す。以下同様



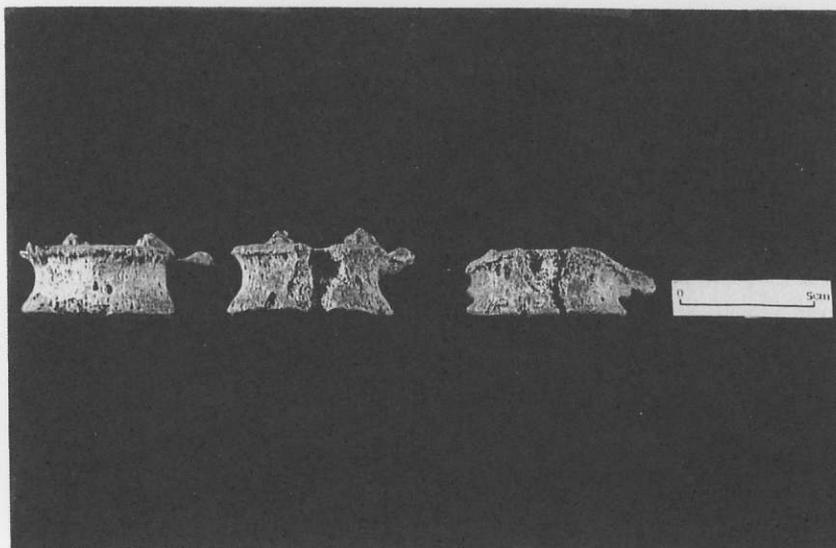
第8図 グラベラ地平周径の面及び耳眼面に固定せる場合の顔面各部の地平面



第9図 下顎骨底面図

註：内側面は歯槽突起の最内膨隆の外廓線も現れている。

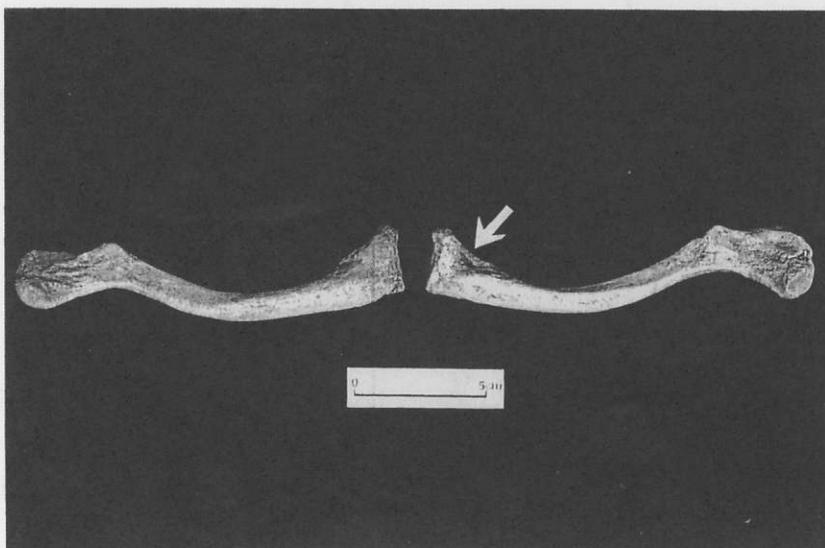
- 註
- グラベラ上頭蓋地平周径の位置
 - ナジオン上の位置
 - 頬骨上顎縫合上端の位置
 - 頬骨上顎縫合下端の位置
 - 前鼻棘の位置



第10図 下部腰椎骨前面観
註：3者共に棘突起は破損している



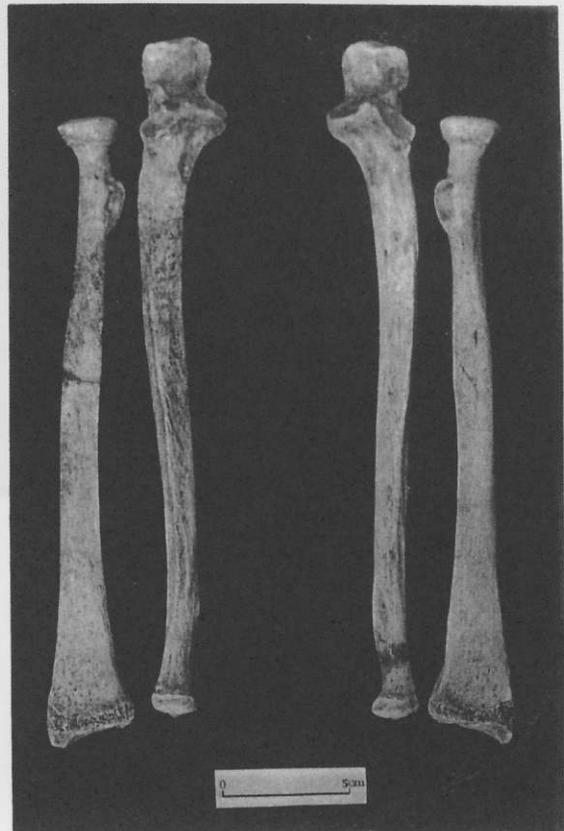
第11図 肩甲骨後面観
註：矢印は消失せる肩峰を示す



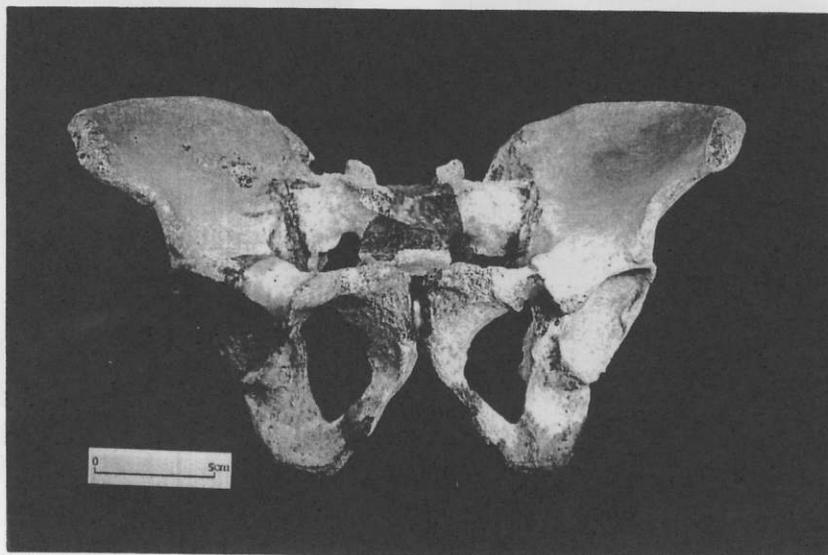
第12図 鎖骨下面観
註：矢印は緻密質の穿孔を示す



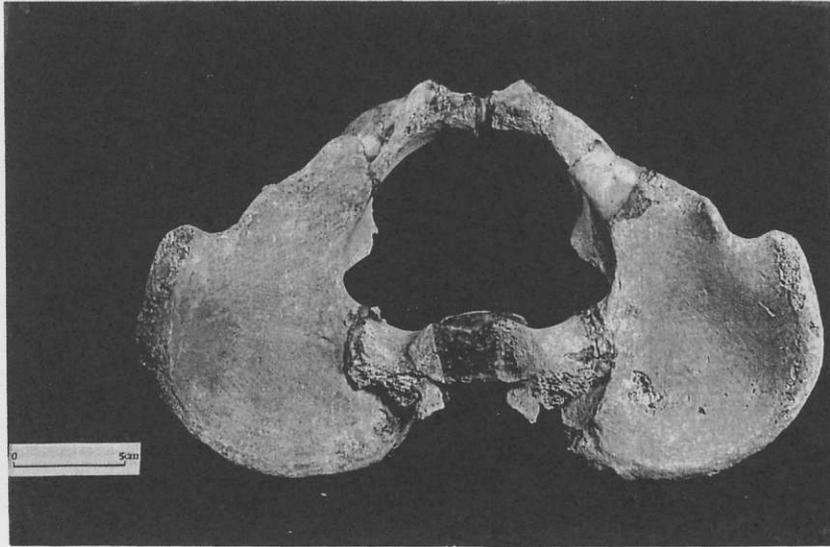
第13図 上膊骨前面観



第14図 尺骨及び桡骨前面観



第15図 骨盤前面観



第16図 骨盤上面観



第17図 大腿骨前面観



第18図 脛骨、腓骨及び膝蓋骨前面観
註：左側腓骨は外側面を示す

4 曾畑貝塚出土ハイガイの開殻痕について

可兒 弘明

(1)

採集経済時代の人々が積極的に捕採した水産資源のなかで、貝類は

- a 簡単な道具あるいは素手で誰にでも容易に、しかも豊富にとることができる
- b 蛋白質に富み、脂肪とくにグリコーゲンを多分し、灰分・各ビタミンをも相当量ふくみ熱量も高い
- c 美味であるばかりでなく、一般に生活力が強いので水からあげて後も長時間にわたり生きているので、保存に都合がよい

の諸点からすぐれた地位を占めていた。曾畑貝塚におびただしい貝類の廃殻が集積^{註1}している事実も、当時あって貝類が重要な価値を占めていたことを考慮すれば、容易に理解される。もとより貝肉は副食物の域を脱しえなかったろうことは明らかであるが、全体的にみて当時の人々が現代人よりも、はるかに貝肉を好んで賞味していたであろうことも否定できないのであり、調理についてもまたそれ相応にさまざまな工夫がなされていたと思われる。

貝塚の貝類は殻つきのまま漁場から持ち帰ったものであるから、殻から貝肉をとり出す必要があった筈である。その方法としては

- イ 殻ごと直火にかけて処理する
- ロ 殻ごと煮沸用土器に投じて熱湯で煮る
- ハ 一度剥身にしてから生食あるいは干物につくり、または熱処理する

の三大別が考えられる。第一に、曾畑貝塚の廃殻のなかには火にあたって殻が変質しているものがあったので、直火による処理法がとられていたことがわかる。第二に、二枚貝の殻の内側に、貝の液汁がこびりついているものもみられたので、殻ごと煮沸する方法もこれまた曾畑で行われていたことがわかる。そして第三の剥身であるが、これについてハイガイの廃殻中に注意すべき資料が得られているので、以下これについて二、三所見を述べてみよう。

(2)

曾畑貝塚から発掘したハイガイのなかに、破損した空殻が相当あって、調査中よりとくに留意して採集したのであるが、その破損の仕方は大別して二つに分れる。

第I例：写真1、2^{*1}に示した^{註2}ように、貝殻の前端あるいは後端のいずれか一ヶ所に破損を生じている。ある標本では腹縁にかけて大きく欠損している場合があり、また別の標本ではごくわずかな範囲にとどまって、その大きさは一定していない。しかし、破損個所が右殻の場合でも左殻の場合でも、殻をとじている閉殻筋（貝柱）の直上にあたる貝殻の前端かあるいは後端であることは注意を要する。

これらはAトレンチ第4区の貝層の全体から、また第6区と第7区では縄文後期の土器とともに発見されている。もちろん破損の全くみとめられないハイガイと混在して堆積しているので、普遍的にみられるわけではないが、標本として採集したものだけでも50コ以上をかぞえ、1コ、2コという稀小例ではないから、偶然の結果できた破損とは思えない。貝殻に破損を生じた背後には、なんらかの一定した目的があり、その完逐の為に貝殻を破損する必要があったことは明白である。

第Ⅱ例：写真3^{*2}に示すものは、Aトレンチ第1区出土のハイガイであり、大型のものであるが、左右両殻がそろっている。この前端部にもやはり人工の破損がなされているが、第Ⅰ例の形跡と異って薄い破口をみるにすぎない。縄文早期曾畑式の土器層に発見されたが、この例は本標品が唯一つ得られただけである。

こうした破損状態で貝殻が出土した例は、すでに他地方の貝塚で二、三知られていて、直良博士は、貝肉を生そのままとり出すために生ずる破損であろうと考察されている。博士は

- (1) 京都府竹野郡の丹後函石浜貝塚においてアカガイの前後両端部とくに後端部を破口して開殻している例
- (2) 千葉県東葛飾郡東金野井貝塚（縄文式）で、これに近いあけ方をしたオキシジミ・シジミの廃殻例
- (3) 北九州で、福岡県遠賀郡遠賀町城之越貝塚（弥生式）の、ハイガイ・ハマグリ of 殻頂に近い蝶つがいのほぼ中央のところに疵をつけて開殻している例

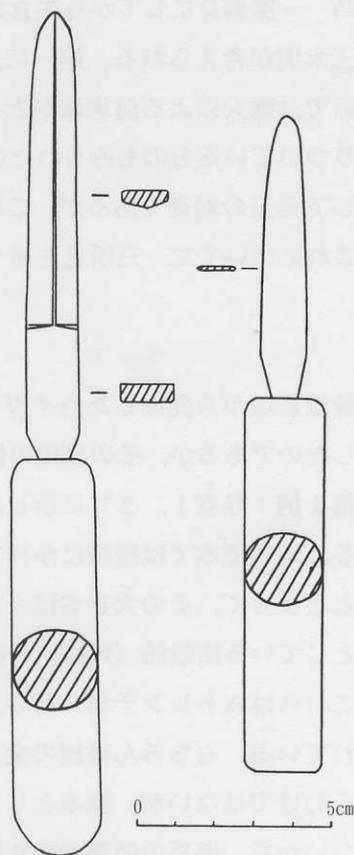
をあげられ、前端ないしは後端部から石器の端をさしこんで貝殻をこじあげたり、あるいは蝶つがいの個所に細めな石器の刃先きをあててこじあげ、生肉をとり出したものと考えられたのである。そこで曾畑においても、縄文早期と後期^{註3}の両時代に、ハイガイの生肉をとり出し、いわゆる剥身を賞味する食習慣があったと一応考えられるのである。

(3)

しかしながら、開殻に使用した石器あるいは骨角器は一体どのようなものであったかとなると、曾畑貝塚から出土した石器・骨角器のなかに、開殻に相当するものが見あたらない。そこで、実験的に、いかなる材質からいかなる形態の道具をつくり、どのような方法で開殻すれば、出土資料と同じような破損を生ずるかを検討する必要を感じ、これをすすめていくうちに、上文したような開殻痕を歴然と殻にのこすような生肉のとり出し方は拙い技術であり、これをもって当時一般の開殻法に及ぼそうとする推察はにわかに下しえないと考えるに至った。

まづ手はじめに現在漁家あるいは魚介商が貝の剥身をつくる方法と道具を調べてみよう。第1図は「カイクキ」とよばれる道具で、左側は都内の魚商がアカガイ剥きに使い、右側は千葉県九十九里海岸方面で漁者がアカガイ・ハマグリ・シジミ剥きに用いる。いずれも木柄に先端の細まった鉄べらをさしこんである。鉄べらの部分は、前者では長さ12cm、巾1.4cm、肉も厚いが、後者はこれに比べ短かく、長さ7.5cm、巾1.2cm、肉もうすい。こうして大小の差はあるが、鉄べらの形は相似していて貝殻剥きにはこの種のもが適していることがわかる。

貝肉をとり出す方法であるが、この道具の先端を、殻頂に近い蝶つがいのほぼ中央にあて、二、三度ねじると、貝はぢきに閉殻をゆるめる。次いでやはりこの道具を貝殻の前端部からさしこみ前の閉



第1図 貝剥き (現用品)

殻筋を断ち、外套膜をはがしながらへら先を後端部に移して後の閉殻筋を切ると、生肉つまり剥身と称するものがとれる。この場合、後端部からはじめても結果は全くかわらない。かんたんきわまりない作業で、未経験の素人でもすぐにこつがのみこめる。この方法によると貝殻を全く傷つけないので、殻に開殻の痕跡はのこらない。また鉄べらのかわりに竹あるいは木製べら、細棒を用いて、これと同じ順序で開殻していても同じように殻に破損を生じないことがわかる。

つぎに、やはりこの種の道具で、直良博士の推察されたように直接貝殻の前端あるいは後端からこじあけて開殻する方法を試みてみると、これでは貝の閉殻力がつよくて作業能率が非常に悪いことがわかる。しかも貝殻にできる傷は、へらに当たった部分にごくわずかな剥落ができるだけであり、その痕跡はちょうど曾畑貝塚で唯一つしかみつからなかった第Ⅱ例の破損状態によく似かよっているが、第Ⅰ例のごとき大きな欠損箇所は生じないことがたしかめられた。

直良博士のあげられた東金井・函石浜の破口状態は詳しく知りえないが、この結果から考えてみると、二枚貝の開殻はやはり蝶つがいをゆるめる方法が有効であり、これには石小刀・石錘あるいは植物質の細棒へら類で目的がはたせる^{註4}。この場合（東京付近ではハイガイの入手が困難のため、アカガイ・ハマグリ・シジミで試験した）殻は全然損傷しないことに注意しなくてはならない。同じような道具で前端あるいは後端からこじあけると、能率が悪いばかりでなく、できる疵も、へらの当たった貝殻の縁がわずかに剥落する程度にとどまるのである。植物質のへら類や石匕で第Ⅱ例の痕跡が貝殻にできることはたしかめられるが、こうした迂遠な方法が当時に一般化していたとは思えないのである。第Ⅱ例の廃殻が唯一個しかみつかっていないことも、それをうらがきしている。

それでは、第Ⅰ例の破損はなにによって生じたのであろうか。前にも述べたように、閉殻筋のところをねらって破殻しているのであるから、剥身づくりの結果であることは明白だが、その方法は決してへら類や石匕によるこじあけとみるべきではない。むしろその欠け具合からいっても、自然石とか槌石のような鈍器、あるいは石斧などによる打撃痕跡であり、その破口部から植物質のへら類、細棒などを入れて閉殻筋をはがしていたように推察しうるのである。この方法は大変幼稚であり、貝殻の取り扱いのみこんだ人だったら、このような手口で開殻しなかったろうと思われ、あるいは年少者の遊び半分の仕ごとであったのかもしれない。第Ⅰ例の資料のなかに、殻長3cm位のちいさいハイガイも多く、剥身に適した筈の大型ハイガイばかりがそろっていないことや、他貝塚にこうした報告例がすくなくないことからしても、この方法もまた一般化していなかったと考える。

(4)

以上のべたように、曾畑貝塚の縄文早期および後期の土器とともに出土したハイガイの殻にみられる破損状態のうち、第Ⅰ例は鈍器により貝殻の前端あるいは後端を破口して生肉をとりだした痕跡であり、第Ⅱ例は同じ個所を植物質のへら類でこじあけて生肉をとりだした痕跡と思われ、すでに直良博士の紹介された三遺跡のうち、函石浜や東金野井の出土例とともに、わが先史時代に、二枚貝を開殻し生の貝肉をとっていたことを物語るものと思われる。

しかしながら曾畑貝塚の資料によって検討すると、第Ⅰ例、第Ⅱ例の破損状態から推定される開殻法は、いずれも貝類の取扱いに習熟していない幼稚な、迂遠で非能率的なもので、かかる方法がとうてい一般化していたとは思えない。つまり開殻痕をとどめるような貝肉のとり出し方は、非常に幼稚なのであり、わが先史時代とくに縄文文化は、水産物の捕獲とその処理法には高度の生活技術を示しているの

で、二枚貝の生肉をうるためには、やはり今日と同じく蝶つがいをゆるめていく方法で、貝殻を損傷することなしに開殻していたのではなかろうか。貝塚の貝殻のなかで、火で殻が変質したり、明らかに煮沸の形跡があるもの以外は、たとえ開殻痕がなくとも剥身みされたものが相当ふくまれているのではないかと私考する。また開殻に使用する道具は、必ずしも石器とは限らず、植物質のへら類で十分なことはくりかえし述べたとおりである。

なおまた生の貝肉を得てからのことは全く想像の域を出ないのであるが、煮たり、干物にして長期保存にしたり、串焼きにした以外に、やはり生のままで賞味することが多かったろうと思われる。魚貝類を生食する慣習は、食生活の上から文化圏を設定していく際に有効なファクターとなしうるので、貝類の開殻法とそれにとまなう生食の問題には、大きな文化史的興味がともなっていることも忘れてはならない。

註

- 1 金子浩昌「石器時代の漁撈活動」(「千葉県石器時代遺跡地名表」所収)昭和34年, P. 81
- 2 曾畑貝塚では、Aトレンチ6区および7区から、ハイガイのほかに巻貝(フトヘナタリ)が殻頂を破損して多量に出土した。しかしこの貝の殻頂は、ことごとく蝕損しているのが自然である(「日本動物図鑑」)。
- 3 直良信夫「古代日本人の食生活」(大八洲古文化叢刊), 昭和22年, P. 192
- 4 薄刃の石小刀は開殻の目的には全く有効でない。

※1 慶応大学から宇土市教育委員会へ移管された資料中に当該写真は含まれていなかった。

※2 同上

5 熊本県内の曾畑式土器出土遺跡

乙益 重隆

九州における曾畑式土器を出土する遺跡は熊本県地方に最も多く集中している。中でも九州中央山地の西麓一帯には、丘陵部の尖端や谷をめぐって有力な遺跡が少なからず分布している。しかるにこうした一連の遺跡は、従来ほとんど組織的な調査が行なわれたことなく、ただ表面採取資料によって判定されているにすぎない。そしてこれらの遺跡では、単純に曾畑式土器だけを出土することがなく、必ず他の各種遺物と混在しながら採取されるのが通例である。従ってここにのべる35箇所⁽¹⁾にわたる遺跡・遺物の概要は、きわめて杜撰なものであるが、今後の研究を進める上の手がかりとなることを期待して、あえて紹介することにした。

1 玉名郡天水町字竹崎竹崎貝塚

竹崎貝塚は鹿児島本線「肥後伊倉駅」の南方約2.3キロ、水田中に孤立した丘の西側斜面にある。この丘は元来離島であったが、自然の干陸と人工的な干拓によって周辺が水田化し、今では陸地につながってしまった。この貝塚は昭和28年8月田辺哲夫氏によって試掘され、その時貝層内より乳頭状の四脚をもった深鉢形の土器が出土した。しかもその器面には九州では珍しい斜行縄文や半截竹管による爪型文などがほどこされ、中には頸部に刻み目凸帯をめぐらしたものもみられた。同様な例は最近福岡県宗像神社沖ノ島や、阿蘇郡西原村別辻・下益城郡城南町阿高貝塚などにも出土し、田辺氏はとくにこれら一連の土器を竹崎式と名づけた。その他にも竹崎では層序関係がわからないが、若干の轟式・曾畑式・阿高式の破片が検出され、幾つかの文化期が重複していることがわかる。とくに曾畑式土器は細片にすぎないが、器形も文様も曾畑貝塚のものと同差なかった。

2 同郡同町字尾田尾田貝塚

この貝塚は竹崎の東方約1.5キロ、尾田川の谷口に位する鹹水産の貝塚で、昭和37年8月田辺哲夫・田添夏喜氏らによって発掘調査が行なわれた。幸いその時の調査には和島誠一・麻生優氏をはじめ、乙益も参加の機会を得た。いずれ詳細については田辺氏の報告によるとして、ここにはその概要だけを紹介したい。

遺跡の中心は現在部落の中央にある地蔵堂附近と考えられるが、全体の規模はかなり広範囲にわたり、地点によって文化期を異にした遺物が出土する。中でも地蔵堂の境内では、南北(第1)と東西(第2)~二つのトレンチを掘って調べた結果、両者ともほぼ同様な結果を得た。すなわち第1トレンチの北側では、上層に阿高式とわずかな竹崎式を出土し、下層及び貝層下には轟式を出土した。同じトレンチの南側では、上層に阿高式と少量の竹崎式、下層に丸底の波状または山形口縁をなした轟式が出土し、最下層、つまり貝層下には曾畑式が群をなして発見された。もちろんこれらの貝層のうち上層部には所々攪乱された部位もあったが、轟式と曾畑式の層は殆んど旧態のままを存し、来離物をみななかった。第2トレンチも同様で、この地点は基磐が東西にわずかばかり傾斜していたが、上層に阿高式と竹崎式、中層に轟式、下層及び貝層下に曾畑式が出土した。

このように尾田貝塚における轟式と曾畑式との前後関係は、われわれがかつて宇土市曾畑貝塚で経験した例や、小林久雄氏が松橋町宮島貝塚で得られた結果と大いにくいちがうものがあり、如何ともしがたい。しかし尾田の轟式は、いわゆるみみずばれ細隆起線文や貝殻連点文・刺突連点文などもあるが、器形が波状または山形口縁の丸底に限られている点に留意される。故に目下の段階では、同じ轟式にも

長い生命と伝統があり、曾畑以前から曾畑以後にかけて存在し得たという解釈が成立するかもしれない。いずれにしてもこうした問題は近き将来に委ねなければならない。尚この貝塚では、他に地点を異にして御手洗A・B、御領式、黒川式なども採取されている。

3 菊池郡旭志村字岩本開拓地

阿蘇外輪山の秀峰鞍岳の西麓には、縄文早期をはじめ弥生を経て、土師・須恵にいたるまで、おびただしい遺跡が群集している。中でも岩本部落の北方智者峯(393.6米)の北麓に位する小川開拓地では、押型文・轟式・御領式などとともに曾畑式土器が採取されているが、遺跡の実態は明らかでない。

4 同郡同村字牟田平

本遺跡も鞍岳の西南麓をめぐる遺跡群の一つで、近世に構築された湯船ノ溜池の近くにあたる。中でも西につづく丘陵の高い部分を俗に牟田平と称し、古くから押型文・撚糸文土器が出土することによって知られる。その他坂本経堯氏によると轟式や擦消縄文のある土器にまじって、曾畑式土器がかなり検出されるという。

5 同郡同村字松ヶ平

本遺跡は矢護川にのぞむ小高い丘陵上にあり、やはり前にのべた鞍岳の西南麓をめぐる遺跡群の一つである。坂本経堯氏によると、ここでも縄文・弥生各種の土器にまじって曾畑式土器が検出されている。

6 菊池郡大津町字御願所七ノ尾

本遺跡は鞍岳西南麓の丘裾が、ひくく横たわった頂部附近にあり、撚糸文をはじめ押型文・阿高・西原・西平・御領など各形式の土器にまじって、曾畑式土器が発見されている。ことに坂本経堯氏は本遺跡から出土する「阿高式土器の太い凹線文間の高い部位に二歯或は三歯ある櫛歯をもつて連点」したものを、七ノ尾式とよんでおられる。

7 同郡西合志村字野々島

鞍岳山麓がゆるやかに西にのびた広大な台地は俗に合志原とよばれ、古くから先史遺跡の豊富な地域として知られる。本遺跡もその一つで、坂本経堯氏によると押型文・撚糸文土器のほかに、曾畑式土器が相当量検出されるという。

8 菊池市大字水源字古川

菊池川の水源地は阿蘇外輪山麓のせまい溪谷より発している。その溪谷にのぞむ傾面には多くの遺跡が分布しているが、余り一般には知られていない。古川遺跡もその一つで、従来曾畑式土器を最も多く出土している。土器片はいずれも典型的な細型刻文からなり、胎土に滑石粉末を混じたものが少なくない。恐らくそれらに伴ったと思われる石鏃や、打製磨製の石器が採取されているが、開墾時の発見であるため遺跡の実態が明らかでない。

9 菊池市大字水源字伊野開拓地

本遺跡は古川遺跡より更に上流にさかのぼること約2キロ、菊池川水源溪谷にのぞむ山麓台地上にあり、広大な畑地の各所に点々と遺物の群集をみるという。坂本経堯氏の試掘成果によると押型文・撚糸文・轟式・曾畑式・阿高式・西平式・御領式・夜臼式その他弥生式土器など、およそ各時期にわたる遺物が出土し、打製磨製の石器も少なくなかった。ことにそれらの遺物は、地点を異にして一応のまとまりがみられ、伊野一帯の台地がいかに長期間にわたって縄文時代人の生活舞台となったかがうかがわれる。尚本遺跡では後期の縄文式土器群に混って、クジャク石の勾玉が出土している。

10 阿蘇郡南小国町大字満願寺字ヒゼンユ

阿蘇外輪山の北側斜面にあたる小国地方では、深い渓谷をめぐって多くの遺跡が分布するが、あまり開発が行きとどいていない。ここにのべるヒゼンユは、小国川の支流田ノ原川にのぞむ小規模な遺跡であるが、遺物の出土量と種類は少なからぬものがあつた。坂本経堯氏の調査によると撚糸文・押型文などの古い土器をはじめ轟式・曾畑式・阿高式・鐘ヶ崎式・西平式・西原式・御領式・ワクト石式など多



彩をきわめ、石器も一通りのものがそろって出土したという。現地は住居跡と考えられるが、何分発掘面積がせまく、遺物の層序関係や共伴関係については明瞭でない。いずれその詳細については坂本氏の報告が公にされるはずである。

11 同郡西原村大字小森字桑鶴土橋

阿蘇外輪山の秀峯俵山の山麓に位する西原村一帯は、複雑な溪谷をめぐっておびたしい遺跡が分布している。中でも桑鶴の谷にのぞむ台上には、土橋をはじめ十余箇所の遺跡があり、いずれも戦後の開墾によって発見された。現地を発掘していないので遺跡の実態はわからないが、表面採取では曾畑式土器を最も多く出土し、有望な地点の一つである。土器は比較的薄手で細型刻文による羽状文・鋸歯文・平行線文などがあり、中には丸底の底部や胎土に滑石粉末を混じたものも少なくない。とくに縦形の石匙や扁平な蛇文岩の磨製石器などは、これらに伴出するものと考えられ、他の類品と比較する上で興味深い。その他撚糸文・押型文・轟式・御領式などの細片があり、わずかではあるが中国地方の船元B式を思わせるような、うず巻凸帯文のある土器も検出されている。

12 同郡同村同，同，古屋敷

土橋遺跡より更に桑鶴の谷をさかのぼること約600米、旧藩時代の間道日向往還に面して古屋敷遺跡がある。この遺跡から出土するのは殆んど曾畑式土器一色に限られ、文様器形ともに土橋の場合と変るところがない。ただわずかに弥生式土器や土師が検出されるのは遺跡が重複しているのであろう。

13 同郡同村同，同扇坂の下

本遺跡も桑鶴溪谷にのぞむ遺跡群の一つで、昭和34年の開墾によって発見された。遺物は前にのべた土橋・古屋敷の場合と同様な曾畑式土器を出土し、石器の量も少なくない。一般に桑鶴の溪谷をめぐる遺跡群から出土した曾畑式は、器面の文様構成に乱れが少なく、胎土に滑石粉を混じたものが目立っている。その点同じ曾畑式でも曾畑貝塚出土の一群に比べて、より基本的な姿を呈している。

14 同郡同村大字宮山宮ノ西

西原村の中央を流れる布田川流域には、小規模な遺跡が多数散在している。中でも宮山部落のはずれにある三ノ宮神社周辺では、丘をめぐって縄文・弥生・古墳時代にわたる多彩な遺跡群がある。そのうち神社の西側はとくに打製石器がたくさん採取され、曾畑式や西平式・土師も出土する。曾畑式の量は少ないが器形・文様ともに典型的なもので、中には底部の破片もみうけた。

15 同郡同村同ひろせ

本遺跡は三ノ宮神社の裏手にあたり、やはり宮ノ西の一連をなすものであろう。曾畑式土器をはじめ御領式・須恵・土師・管玉などが採取されている。

16 熊本市大江町渡鹿小積原

本遺跡は白川の南岸に近い、託麻原台地のはずれに位し、すでに長い間の耕作によって煙滅に近い。東光彦氏の採取によると押型文・御領式・弥生式土器にまじって曾畑式土器をみる量が少ない。

17 熊本市保田窪本町

本遺跡は託麻原台地の地隙に面したせまい地域に限られるが、発見された土器形式は多彩である。東光彦氏によると撚糸文・押型文・条痕文などの古い土器をはじめ、曾畑式・竹崎式・阿高式・御手洗B式・御領式・黒川式などがあり、他に土師・須恵・布目瓦なども散布している。

18 同市画図町大曲

広大な託麻原台地が沖積平野に変換する江津湖の周辺には、点々と遺物の散布地をみかける。東光彦

氏によると大曲遺跡では曾畑式・阿高式・西平式土器が採取されているが、遺物の散布状態が散漫で、遺跡の性格も明らかでない。

19 宇土郡三角町大字波多字立畠際崎貝塚

本遺跡は三角湾にのぞむ波多部落台地の先端部にいとなまれた貝塚で、豊富な貝を包含している。崖面に露出している貝層は、浅い部分で約10種、深いところで1.50米以上もある。発掘調査していないので層序関係がわからないが、轟式・曾畑式・阿高式・出水式などが採取され、昭和29年には人骨も一体出土した。

20 宇土市曾畑貝塚

本文に詳述したので省略。

21 同市宮ノ荘轟貝塚

本遺跡は宇土山塊の丘裾に構成された貝塚で、大正9年清野謙次博士らによって発掘調査が行われた。ついで昭和33年には小林久雄・松本雅明氏らによって発掘され、新しい知見がいろいろと加わった。貝塚の規模は広範囲にわたり、土器の種類はきわめて多種・多様である。しかも地点によって文化期の相異があるらしく、層序の状態も攪乱された所が多く一様ではない。従来検出されている土器には撚糸文・押型文・轟式・曾畑式・並木式・阿高式・出水式・鐘ヶ崎式・西平式・御領式などがあり、弥生式土器では下伊田式・城ノ越式・黒髪式がみられ、他に須恵や土師もある。松本雅明氏によると轟式は四類に大別され、曾畑式は殆んど検出されなかったという。恐らく出土地点を異にするのであろう。

22 同市馬場神山中坪

中坪遺跡は宇土半島の山地と、神馬部落の孤丘との間にはさまれた低い沖積地帯にあり、恐らく遺物は最寄りの周辺台地から転落したのであろう。水路の断面にみえる包含層によると、地表下約20種に土師・須恵の層があり、地表下約1.20米に轟式と曾畑式の包含層がある。遺跡の性格が明らかでないが、轟式も曾畑式も典型的なものばかりで、全体に器面が磨損しているのは、洗い流されたためであろう。

23 上益城郡嘉島村大字上六嘉字カキワラ貝塚

この貝塚は熊本平野のかなり奥まった六嘉台地の西南縁に位し、現在の海岸線から15キロ以上も遠かった地点にある。貝塚は台地の断崖面にかかり、純鹹水産の貝より成る。そのために層序が乱れていて一概に信頼できないが、出水式と一部の御手洗B式を含む層から人骨8体がならんで発見された。出土遺物には押型文・撚糸文・曾畑式・出水式・鐘ヶ崎式・御手洗B式・武式・西平式・御領式などがあり、更に弥生式土器の黒髪式・須玖式や須恵・土師もあり、それらの出土状態は著しく乱れていた。しかし曾畑式の出土層はやや地点を異にし、貝層のはずれの比較的浅いところから、二箇体分の大きな破片を検出した。一箇分は幾何学的な鋸歯文と直線文のくりかえし文様から成り、他の一箇分は乱れた平行線文を描き、両者ともに一括出土した。

24 同郡御船町辺田見貝塚

この貝塚は緑川の支流御船川をさかのぼった谷口に近い、辺田見部落の南端にある。遺跡の規模は小さいが、表面採取によると出水式・鐘ヶ崎・御手洗A式・市来式のほかに少量の曾畑式があり、その実態は明らかでない。

25 同郡同町大字七滝字間伏附近（俗称 御池原）

阿蘇外輪山の連峯が西南方に流れる裾野一帯は、俗に大矢野原とよばれ、広大な原野が起伏している。中でも御池原とよばれる高原（海拔約400米）には干無田・間伏など、有力な縄文式遺跡があり、おびた

だしい遺物が出土している。現地を踏査した東光彦氏によると、遺跡の範囲はいずれも広大にわたり、遺物も各時期にわたって多彩をきわめている。表面採取品によって分類すると押型文・捺糸文・条痕文・轟式・曾畑式・並木式・御手洗B式・市来式・西平式・御領式・黒川式などがあり、他に弥生式後期の土器や土師・須恵もみられた。とくに曾畑式には胎土に滑石粉を混じたものや、文様構成の整然としたものが多く今後の調査が期待される。

26 下益城郡城南町字阿高貝塚

熊本平野の南縁を劃する木原山（標高314.4米）の北麓には、有名な⁽¹²⁾阿高貝塚と御領貝塚とが谷をへだてて対峙している。中でも阿高貝塚は大正5年以来数回にわたって発掘され、多くの遺物を出土した。しかるにその層序関係については明らかでなく、今では甫調査の必要にせまられている。従来発見されている土器の主体をなすのは阿高式であるが、他に押型文・捺糸文・曾畑式・並木式・竹崎式なども少量ながら出土している。

27 同郡松橋町大字豊福字両仲間宮島貝塚

この貝塚は八代平野の北縁にのぞむ、豊福台地のはずれにあり今は煙滅に近い。かつてこの貝塚を試掘した小林久雄氏は「表層及び次の混土貝塚上部には弥生式土器、それより貝層上部には連点文及び細型刻文の曾畑式土器を出土し、最下層には細帯隆起土器がある」報じておられ、曾畑式よりも轟式が古いのではないかという予測を下された。しかるに前にのべた尾田貝塚では、その逆の結果があらわれた。いずれにしても曾畑と轟は、時間的にきわめて近い前後関係にあったことだけは確かであろう。

28 八代郡竜北村字四ッ江貝塚

五箇荘山地の西麓砂川の谷口附近には、竜北村大野・同西平・同土穴瀬など、有力な貝塚が少なくない。四ッ江貝塚もその一つで、花岡興輝氏の採取品によると曾畑式・鐘ヶ崎式・御手洗A式・武式・西平式・三万田式・御領式などがある。中でも曾畑式は量的に少ないが文様・器形ともに典型的なものである。

29 八代市産島産島貝塚

産島はもと孤島であったが、近代の干拓によって陸つづきとなった。貝塚は島の東南側にあり、規模は小さい。江上敏勝氏によると少量ではあるが押型文土器と、明瞭な曾畑式土器が採取されている。しかし何分にも短時間の表面採取調査によるものであるだけに、遺跡の実態はわからない。

30 八代郡泉村下鶴泉村第四中学校内

五箇荘山地の山深い下鶴は、球磨郡⁽¹³⁾五木村に接した僻陬の地である。現地は袋状をなした溪谷の傾斜面にあり、徳永隆憲氏によると中学校の敷地を拓いたさいに、おびただしい縄文式遺物を出土したという。土器は捺糸文・押型文・轟式・並木式・出水式などがあり、中には曾畑式とみられる一群が含まれている。とにかく九州山地の最も山深い五箇荘地方にも、こうした遺跡があることは注意しなければならない。

31 水俣市宝河内

水俣川の上流溪谷に面した宝河内の台地には、広い地域にわたっていろいろな時期の遺物が散布している。齊藤俊三氏の採取品によると押型文土器をはじめ、轟式・並木式・阿高式・御領式などがあり、中に明瞭な曾畑式土器片を見出した。

32 人吉市木地屋町鳴石

球磨川の支流胸川の上流溪谷には、未開発の遺跡が少なくない。現地踏査不十分なため詳細を記せないが、岡直温氏の採取品によると、木地屋部落に近い谷沿いの小平坦地から曾畑式土器が出ていること

がわかった。しかし破片から推定される文様は、一般に刻文が浅く沈線化した感があり、また直線文は弧線化する傾向がみられるので、或は曾畑式そのものというよりも、日勝山式ではないかという疑を存する。

33 同市願成寺町上ノ寺

本遺跡は人吉市の東北部を限る願成寺丘陵の一部にあり、近くには胴部に二段のふくらみをもった平底の押型文土器を出土した石清水遺跡がある。上ノ寺出土遺物の主体をなすものは手向山式であるから、ここにのべる曾畑式の破片も、手向山式にあらわれた曾畑式文様の踏襲かもしれない。一般に手向山式にあらわれる曾畑系の文様は、施文が浅くて荒く、著しい退化現象がみられる。

34 球磨郡免田町字黒田岡留神社東側

本遺跡は白髪岳山麓よりゆるやかな傾斜をもって北に流れる、扇状地の先端部に位し、昭和22年の開墾によって発見された。出土遺物の主体をなすものは手向山式一色に限られる。したがって本遺跡では、たとえ曾畑系文様の土器片を含んでいても、その実態は手向山式とみるべきである。ことに本遺跡出土の曾畑系文様の土器片は、日勝山式にみられるような弧線が発達しており、中には文様間の空隙に、荒い縄文をうずめたものさえみられる。

ちなみに手向山式土器は鹿児島県大口市手向山出土を模式とするもので、肥薩国境を中心とする山岳地帯だけに、特異な分布を有する疑問の多い土器である。器形は口縁部がやや開き気味な深鉢状を呈し、胴部は折れて明瞭な菱線をなす。そして菱線上にはしばしば綾杉状の鎖つなぎ文様や、同心円の連続文などがあらわされ、底部は浅い上げ底になるものが多い。器面の文様は内外に早期の土器に特有な燃糸文を施したⅠ式をはじめ、楕円・山形・格子目の押型文を有するⅡ式、縄文を施したⅢ式などがあり、更に轟式の文様を踏襲したⅣ式、曾畑式を踏襲するⅤ式、日勝山式を踏襲したⅥ式などにわけられる。このように手向山式は、九州における早期の土器文様を、一定の器形に集成的に包括していることから、恐らくその時期は前期初頭頃の所産ではないかとみられている。ことに前述した人吉市石清水の押型文土器のごときも、やはり手向山式の一つとみなされ、現段階ではまだ未解決の問題が多分に残っている。

35 天草郡五和町大字二江沖ノ原貝塚

本遺跡は天草下島の北端、通詞島に対峙する砂丘上にいとなまれた貝塚で、昭和33年坂本経堯氏を中心とする調査団によって発掘が行われた。遺跡の規模は広範囲にわたり、地点によって文化期を異にする。中でも汀線に近い貝塚では、各貝層に出水式を中心にその前後関係を示す有力な土器群が出土した。更に貝層下の砂層には轟式を主とする尖底土器や、典型的な曾畑式土器が出土したが、それらの前後関係を分離することはできなかった。その他地点を異にして御領式・黒川式・弥生式土器・須恵・土師などがあり、石器をも含めて集計すると莫大な量に上る。いずれにしてもその結果は、近刊される報告書にまちたい。

註

- 1 竹崎貝塚についてはまだ報告された文献がない。
- 2 小林久雄「肥後縄文土器編年の概要」考古学評論第1巻第1号（昭和10年）
- 3・4 坂本経堯「小国田ノ原—考古随想—」プリント私刊（昭和26年）
- 5・6・7・8 「山西村誌」（昭和34年）
- 9 松本雅明・富樫卯三郎「轟式土器の編年—熊本県宇土市轟貝塚調査報告」『考古学雑誌』第47巻第3号（昭和36年）

- 10 橘孝文「宇土市轟大字馬場に発見せる曽畑式土器」ともし火5号, 宇土高校社会部
- 11 乙益重隆「熊本県上益城郡カキワラ貝塚」日本考古学年報8（昭和30年度）
- 12・13 註2
- 14 小林久雄「九州の縄文土器」人類学先史学講座Ⅱ（昭和14年）
- 15 寺師見國「南九州の押型文土器」古代学第2巻第2号（昭和28年）

6 曾畑貝塚発掘調査関連報道記事

熊本日日新聞社

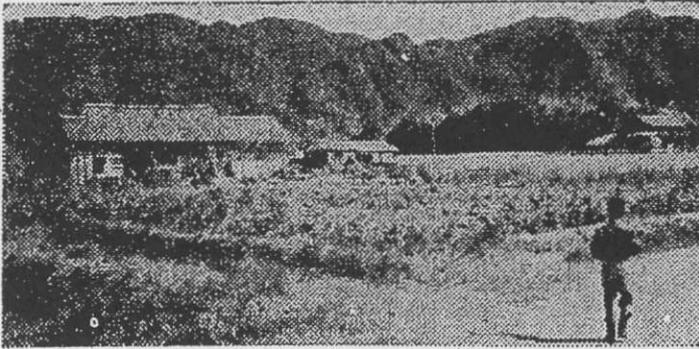
慶大、曾畑貝塚(宇土)を発掘

先史文化の解明へ

磁気測定など 28日から科学調査

日本の先史時代を探る宇土市吉野の曾畑貝塚の発掘調査が慶大考古学民族学研究室を中心とする調査団により、二十八日から十日間行なわれ、この間、学界の注目を集めている。

調査団長の慶大考古学民族学研究室(教育委員会)送つてきた調査計画案の江坂教授から、二十日宇土市「書」より、一行は、二十七日夕刻



発掘を待つ曾畑貝塚(畑の部分)

来月、二十八日から十一月六日まで調査発掘に当る。調査団のメンバーは江坂氏のほか、熊本大助教授、益取隆氏、大阪府文化財専門委員、大分県文化財専門委員、新川光夫氏(別府大助教授)、東京大学理学部人類学教室、理博渡辺貞雄氏、熊本市博物館東光彦氏など九人で、宇土高校社会科も発掘作業に協力する予定、費用は文部省研究費、慶大考古学研究室と江坂氏の私費が充てられる。

一行は同市本町米谷旅館に宿泊、二十八日午後から発掘にかかり、貝塚の中央部(畑地)に幅一、長さ東西五〇メートル、深さ一メートル(試掘)一

しており、成果が期待されている。

本と、これに厚層トロンゴ二本(幅一、長さ一〇)を掘き、出土状況に応じて拡大していく。

同貝塚は縄文前期の遺跡で、ここから出土する土器は、曾畑式と名付けられ、土器編年の基準とされている。大正時代以来有名な考古学者が現地調査を行なっており、曾畑式土器が朝鮮半島から出土する縄目土器文化の系統をひくことが明らかになっている。

この調査では、こうした曾畑式土器文化の系統的研究とその文化内容の究明に主眼がおかれる。また同貝塚からは、曾畑式とは時期の異なる縄文形式の土器片が発見されているので、その土器の出土する層位関係を追及し、曾畑式土器に伴う石器、貝殻器などを研究する。とくに東大人類学教室の渡辺理博は同貝塚の出土品から磁気測定を測定し、年代を推察するといった科学的な調査を行なうという。

1959年(昭和34)10月15日付

曾畑貝塚の発掘始る

宇土 慶大の江坂氏ら迎え

宇土市古留の曾畑貝塚の発掘は慶大考古学民俗学研究室の江坂輝歌氏らによって予定通り二十八日から着手された。当日は江坂氏のほか賀川光夫(別府大)渡辺正久(九大)の両氏や宇土高校社会部OBなど数人が参加。発掘予定地の木村青野さん方のアワ畑を整理したのびで終り、本格的な発掘作業がはじまるのは二十九日後からの予定。

か東大理学部人類学教室の渡辺直経理博が地層構造調査のため大給宮城巽7岡藤原副館長が魚骨研究のためそれぞれ参加する予定になっている。

的研究に主眼をいた総合調査で学界からその成果が期待されている。
◇江坂氏の語 曾畑式土器ともなう文化内容を明らかにするのが今回の調査の主目的で、日本の先史文化をさぐるという点で大きな意義がある。

同貝塚は明治十六年に東大理学部人類学教室の若林勝邦氏が調査したのが最初(貝塚調査では九州で二番目)で、大正十一年には中山平次郎(九大名誉教授)清野謙次(京大教授)の両氏が調査している。ついで昭和八年下益城郡城南町の小林久雄氏(旧後考古学会長、前城南町長)が発見した「肥後の縄文土器の編年」という論文の中で同貝塚から出土する土器を「曾畑式」と名づけ全国に曾畑貝

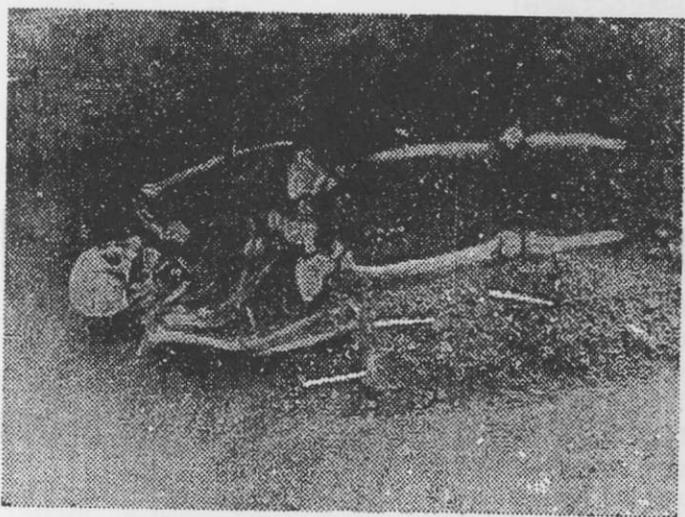
縄文期の人体を発掘

曾畑貝塚 多数の土器片も

テンヤマンヤのまきわだった。

慶大調査団による宇土市古留の曾畑貝塚の発掘調査は、二十九日から本格的な発掘作業が始められたが、早くも縄文期の完全な人骨一体を掘りあてたほか曾畑式土器片や右玉類など多数が出土。江坂団長ほか調査員たちを驚かせた。発掘調査の手はじめはアワ畑にレンチ掘りの作業は同日午前十一時すぎから始まったが、蒸籠レンチのほば中央部に並ぶ木村青野さん方のアワ畑で、表土下四十五センチの混土質層で人骨を

発見した。成人女性の人骨で身長は一・五メートル。土を掘って伸張葬(死体の両手足を伸ばした状態)であおむけに寝せて埋葬するものにしてあり、縄文期(六―七千年前)の人骨としては珍らしく完全な状態を保っており、貴重な史料として調査員たちを驚かせた。



発掘された縄文期の人骨＝宇土曾畑貝塚で

1959年(昭和34)10月30日付

1959年(昭和34)10月29日付

土器や石器が続出

発掘すすむ曾畑貝塚

日本人の祖先の文化を探る宇土市
岩古曾の曾畑貝塚調査は発掘がす
すむにつれ多くの収獲があがっ
ている。三十日も朝から基礎トレ
ンチの掘きくが続けられたが、貝
塚西側の畑でかなりの厚みをもつ
た貝殻が現われ、その中から典型
的な曾畑式土器や、同貝塚独特
の石器が出した。

同貝塚は大正七年に京大教授府野
謙次博士(故人)が人骨五体を発
掘し、曾畑貝塚は掘りつくした
と学説を発表したが、こんどの調

曾畑貝塚の発掘作業



査部長江坂輝彦氏(故人)は二十
年前に同貝塚を見て、曾畑貝塚の
残存を確信していた。廿日の発掘
で貝塚の中から出土した土器には
「細形刻文」(細い線が幾何学的
な文様を描く)のある典型的な
「曾畑式」で、同じ場所から見つ
かった石器もへん平な形をした片
刃型製であるところから、このト
レンチ現物は曾畑貝塚の一部とな
ることが確認された。しかもこれ
らの土器や石器はシベリア大陸、
朝鮮半島で出土する極古土器文化
の土器など共通の特徴があるこ
とがわかり、曾畑式土器を通じて

縄文早期の文化内容を探るといっ
こんどの調査目的に近づきつつ近
いてきた。
いっぽう二十九日に発掘した人
骨一体は調査団の復讐に持ち帰
ったが、埋葬時期には多少の疑
点もあるので、こゝで出土現場
を掘りひろげて土、石器を検討
したうえで縄文早、後期の別を
追究することになった。
なほ三十日は園田花園小(林原華
生校長)の六年男客員二十八人が
発掘予定地のイ土掘り作業を奉仕
したほか、地居婦人会の幹部らが
調査団に協力を提供するなど祖先
の歴史解明のため協力した。

1959年(昭和34)10月31日付

大昔は泥海だった

曾畑貝塚 出土品にマガ玉?

宇土市岩古曾の曾畑貝塚発掘調査
第四日目の三十一日は宇土高校や
鶴城中の生徒ら約二十人も協力し
前日に引き続き基礎トレンチの
掘きくをすすめた。

同日までにわかつた貝の種類は
十七種(一枚貝十種、マキ貝七
種)にのぼっているが、これら
の貝はいずれも泥海の底に住む
もので六、七十年前には同貝塚
地先は皆しよつのない泥海だっ
たことが推定される。また直径
三センチの一枚貝類に限って
むき身にするためこぼれたと
思われるキスがみついているもの
が多数あるところから同貝塚の
居住民は大きな貝はゆでて食べ
たが小さな貝は好んで生食した
らしいことが興味をもたれた。

土器以外の出土品では黒曜石のヤ
シロ二個があったが、これは宇土

のマガタマまの破片一個があつ
たが、これは全国でも縄文早期の
遺跡からは出土した例はなく今後
の研究課題となった。

なお基礎トレンチの東側からは
曾畑式土器は、また西端では
曾畑式と異なる種の土器が出
土しているのが層位関係の追及
が焦点の一つとなってきた。

1959年(昭和34)11月1日付

層位の追究すすむ

曾畑貝塚 雨の中で発掘調査

熊本大発掘調査による宇土市曾畑の曾畑貝塚の発掘調査は一日も雨の中心を断つて行なわれた。作業は層位にすすみ、東西五十センチメートルの断面で、西端の調査を完了し、午後に東、西両端を調査する。二本の南北、レンチ掘りに着手



雨にぬれて曾畑貝塚の発掘作業



ものに限られる。その下部が第一層で厚さ二十センチ。第二層は貝層で厚さ三十センチ、レキ(砂)が多く貝もハッキリな大型のものばかりで、出土する土器は孤線文(上部直線文)下部の特徵がはっきりした曾畑式だった。第四層は褐色土が四十センチ厚あり、その下は赤粘土になっている。第四層に含まれる土器には貝殻や茶袋文や細い線刻の文様があり曾畑式より

りも古いものと推定されている。いつは貝塚東端は縄文後期の土器を含む貝層があり、その下の層からは縄文早期の押型文や条痕文のある土器が出土したが曾畑式はほとんどなかった。これらの層位関係はひきつづき追究される。

同日は地元の大和宇土市長が現地を訪れたほか、阿蘇郡山西村から高橋教育委員長ら七人も天童史談会からの見学会が相次いだ。なお三百人ほど参加の曾畑考古学見学会が、同日午前十時宇土駅前集合。

1959年(昭和34)11月2日付

骨針と腕輪を出土

きょう賑かな見学陣

曾畑 宇土市曾畑の曾畑貝塚(曾畑発掘調査)は一日も雨の中心を断つて行なわれた。作業は層位にすすみ、東西五十センチメートルの断面で、西端の調査を完了し、午後に東、西両端を調査する。二本の南北、レンチ掘りに着手

の層の一種、無縁タイ、ススキ、インジの三種となっている。このほか同日は曾畑(貝塚)の骨針と腕輪の出土が注目された。骨針は、土器の包絡層から出土した。なお三日の「文化の日」も引き続き発掘作業を続けるが、この日朝から曾畑考古学見学会の一行も曾畑貝塚の発掘現場を訪れ、発掘作業を視察する。

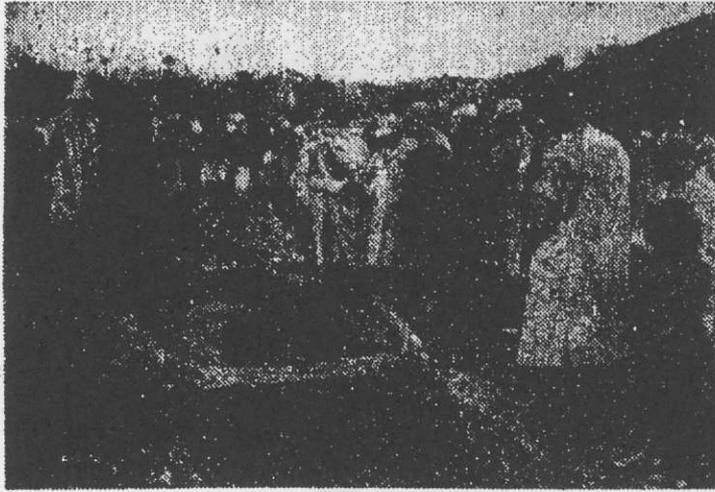
1959年(昭和34)11月3日付

見学で賑わう曾畑貝塚

警官も考古学の勉強

発掘中の珍しい装身具が出土

宇土市岩古曾の曾畑貝塚発掘調査は三日朝から小雨もよりの悪天候の中で続行され、多くの貴重な資料を得た。



この日は文化庁の休日であるが、水谷邦文文庫部長、松本雅明教授、山崎助教授らの案内で下原県警本部長ほか警署関係者の一行十数人が見学したのを始め、関係者百数十名の参加約二十人が指次いで訪れた。また、小島、山崎、宇土の各高校も講堂中、熊大付属中、八代、庄生ら約三十人も参加作業を行った。今回の発掘には全国でも初めて「アワビ」の貝殻が出土した。この「アワビ」の貝殻は、長さ五・五センチ、幅二・五センチ、厚さ二・五センチが測定された。これは縄文後

期土器の包含層から出土したもので、アワビを通りて首に下げると呼ばれる。ほかの貝殻でも出土したものもあるが、アワビ貝殻は全国でも初めてという貴重な史料。このほかこれまでの調査結果、出土した土器はすべて縄文後期が第一貝塚(西)と第二貝塚(東)の二つに分かれることが確認された。曾畑貝塚は第三(西)、長き東西九〇メートルにわたっているが、このうち、西端から一〇・三〇メートルが第一貝塚で縄文後期の遺跡。東側(一〇・七〇)が第二貝塚で縄文後期のもの。明治時代からの四回目の調査で、同貝塚が二つの年代に区分されたことが大きな収穫。

第一貝塚の縄文後期から出土する土器は典型的な「曾畑式」だが、貝塚上部と下部とも貝塚底下の土層から出土する「曾畑式」はこの様式に区分されることが、正確な調査のため、系統を比較検討を行なっている。また、「曾畑式」の最下層から縄文

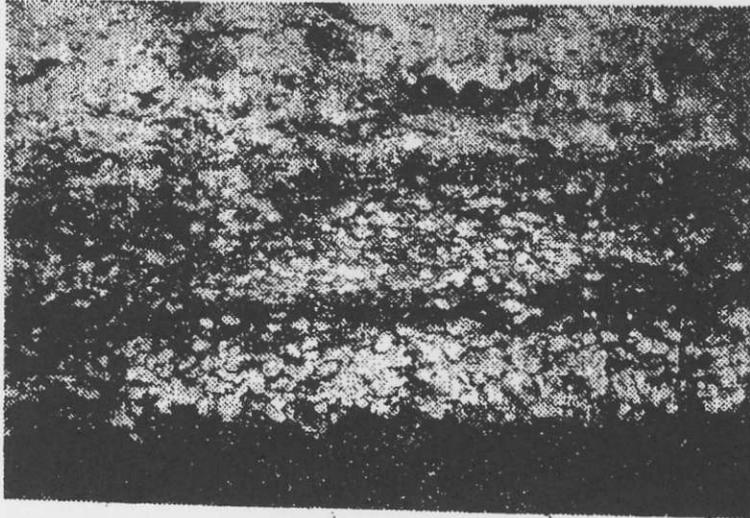
後(同市宮田)の最下層で出土したものと同様の貝殻が、奈良文の細縄文の土器が出土している。これらの土器が「曾畑式」よりも古いことが立証された。このことは「曾畑文化」がアワビ大陸を経て朝鮮半島から九州地方に渡来する以前に山陰方面から伝来したと考えられる。アワビ系縄文土器文化は瀬戸内方面から東北地方へ渡来したと思われる。縄文土器文化は別の系統の文化がこの地方にすでに渡来していたことを意味するものとみられる。

第二貝塚では縄文後期の土器が出土するが、九州のほぼ中央部にあるという地域的な関係から、北九州的なもの(鎌ヶ崎式)と南九州的なもの(市来式)が混在しているのが注目された。

な同貝塚発掘調査は「白土」であるが、その学術調査の会費は八日後六時半から同市五十小講堂で開かれる。船日歴史博物館(宇土市教委、本井共)で調査団長の江坂隆彦氏(慶大考古学研究所)が「曾畑貝塚の問題」というテーマで発表する。

1959年(昭和34)11月4日付

阿波県高田郡北区下ノノリ



第I層表土

第II層(第1貝層) 縄文文化後期

第III層

第IV層(第2貝層) 縄文文化 (曾畑式土器)

第V層 縄文土器 (曾畑式土器)

曾畑貝塚の発掘調査

江坂 輝 弥

(4)

本誌に掲載された前期の調査結果から、曾畑貝塚の初期の層から中層にかけての年代が、縄文文化後期のものと推定される。以下、調査中に判明した主要な遺物を紹介したのである。遺物に關しては、本誌の完成まで、お待たせしたいと思ふのである。

曾畑貝塚は以上記すごとく各種の時代の遺跡が重複して存在する複雑な遺跡であるが、これら各時代の遺物が層位を異にして出土するため、今回の発掘調査において、今まで不明瞭であった曾畑式土器の縄文文化における層位的位置を大略明確にすることができたのは大収穫であったと思ふのである。

各期の複合遺跡

縄文文化編年にキメ手

編年の概要と題する論文を第II層の下に、さざん山形、格子目、のろみ、曾畑式土器はいか表された時に記されている。横田などの押捺文器を出土に古く考へても早期の終末より、當時氏は本文(同層式土器)を最古形式と考へられたが、西九州地方に多い、平底、右の層位的な出土事象より考へ、細帯起文(曾畑式土器)を田原形線紋を併せた土器で、類の次に考へられ、次に遺品文、爪戸内海地方や、大分県早水台遺跡、受け阿高式土器文化、曾畑式土器の間に、多くの形式が介在することは考へられ、その次に細帯起文(曾畑式土器)を考へられてくるものである。また、その形式と考へられるので、こ

なお今回の発掘調査にあつては、農繁期のことも考慮的に兼任して下さつた地元婦人会の方々、宇土高校社会部部長有志諸君、その他地元の方々に心からお礼を申し上げたい。

【主査】江坂輝弥(慶大考古学研究所) 【調査員】笹澤尚洋(同) 司馬明(同) 岡本大助(同) 可児明(同) 岡本大助(同) 藤川光夫(同) 別府大助(同) 渡辺直経(東大理学部人間学教室) 渡辺正氣(九大考古学研究所) 坂本建雄(熊本県文化財部) 小林久雄(肥後考古学会) 東光彦(熊本市立博物館) 藤原二郎(宇土高校教諭) 松岡史(佐賀大学学研究所) 大橋守(仙台図書館司書主任)(おわり)

